の有益なる統治を歡迎し、ローマが與へたる未曾有の平穩と安全とを樂しみ、ローマの市民權と帝國の官職とを彼等の野心の最高の目標なりと考へるやうになつた。アレキサンダーの例に倣つて、ローマは從來人類を區別したる人種及び宗教の障壁を破棄し、ギリシア人と蠻人とを單一の政治に於て融合せしめ、東洋と西洋とを接觸せしめ、文化世界に統一の意識を印象せしめたが、この意識は今日に至つても全く失はれはしない。ローマ帝國の世界主義的傳統は、殊にカトリック教會に於て永續せしめられ、近代民族國家の過度の黨派心を緩和することに於て今尚力强く働いてゐる。

しかし、ローマの平和の黃金時代は永續することが出來なかつた。マーカス・オーレリアスの死は急速なる分裂の一世紀を開始した。チュートン蠻族は國境を超えて壓倒的な前凶的な襲擊を試みるやうになり――殊に、フランク人はライン河を、ゴート人はダニューブ河及び黑海を渡つて來た。ユーフラテス河の彼岸に於ても亦、新しい土着のペルシア王朝が外國人たるパルチア人（六〇を見よ）に取つて代つて、ローマとの狂暴なる鬪ひを始めたが、その鬪ひは間を措いて四百年の間繼續した（西曆二二六―六二八年）。けれども外敵の攻擊は時を同じくして現はれたる國內の衰頽よりも重大ではなかつた。帝位繼承の紛議、軍隊の謀反、內亂は、政府の力を枯渴せしめ、西曆二一一―二八四年の七十三年間に二十人以上の皇帝が不慮の死を遂げた。東方から軍隊が持つて來たところの疫病は、住民を斃死せしめて人口の實際的減少を來した。奴隷制度は、益々プロレタリアを困窮に陷れて、勞働を墮落させ且つ產業を衰頽させた。施與は分量が多くなり、鬪技的觀せ物は益々野蠻となり、演劇は放慾の深間に陷つて、都市の暴民を腐敗させた。古い宗教は哲學者に對しても民衆に對しても等しく力を失つた。古代文化は消耗のまがふかたなき徵候を示した。キリスト教は、その新生の豫約にも拘らず、尚ローマの政治を弱めるも一つの力たるに過ぎなかつた。

六八、ヂオクレチアンとコンスタンチン　西暦二八四年には帝國の分裂は急迫し且つ避くべからざるやうに思はれた。けれども、その年の中に、殆んど偶然の機會がヂオクレチアンの手に權力を與へたが、彼は卑賤より身を起したイルリリアの軍人であつて、卓越した能力と性格の力とによつて卒伍の間から最高の軍事的支配の地位に上つた。驚くべく傳統の枷より免れ、且つ時代の要求に明白な確信を有したる彼は、進んでローマの憲法を變更せんとしたが、それは結局オーガスタスの曖昧な帝王的政治を廢止して、東洋の獨裁政治に範を取つた新帝國を樹立せんとするものであつた。中央行政の統一と能率とを恢復せんがために、彼は元老院から舊來の權力の總ての殘物を奪ひ、絶對君主政治を創設した。長い河川國境の防備を改善するために、彼は帝國を四つの行政地域に區分し、夫々ニコメヂア(彼自らこゝに住居を定めた)、シルミウム、ミラン及びトレーヴに政廳を置いた。將來の帝位繼承の紛議を防止するために、彼は帝位の相續に關する周到なる規則を定めた。軍隊の謀反する危險を少くするために、彼は民政の權力と軍政の權力とを分離せしめ、州及び軍團の大いさを減じた。國家に對する敬虔と献身とに關する古來のローマ精神を復舊せしめるために、彼は神々の崇拜を復活し、宗教的熱情の消えたる焔を再び燃やさうとした。これがために彼はキリスト教會と猛烈に爭ふやうになつた。彼は容赦なき迫害によつて教會を擊破しやうとした。この點に於て彼は全く失敗したが、彼の失敗は西暦三〇五年に彼が退位するに至つた原因の一つであつた。

ヂオクレチアンが繼承問題を解決せんとしたるに拘らず、混沌は再び現はれ、彼が退位してから數ケ月の間に、六人もの皇帝が對立して、複雜な破壞的な爭ひをなすに至つた。次第に、戰鬪、殺害、及び變死によつてその數が減じ、終に西暦三二三年にはコンスタンチン大帝が政權を專らにするやうになつた。

コンスタンチンは十七年の鬪爭の間に最上の意義を有する一つの教訓を學ん

だ、それは將來の希望がキリスト教會にあると云ふことである。そこで彼は教會と和を結び(西暦三一三年)、益々これを保護し、終に首府を「新ローマ」――コンスタンチノープル、卽ちコンスタンチンの市として一層良く知られてゐる――に移したが、この市は古ローマの異教的關係より免れ、その建設(西暦三三〇年)以來キリスト教徒の神の崇拜に捧げられたのである。

第十八章　キリスト教會

六九、福音のための準備　ローマ帝國の威力と威嚴とに對するキリスト教會の勝利は、世界史が記錄すべき最も驚くべき事件の一つである。それは地上の弱きものが强きものを狼狽させ、建築工によつて斥けられたる石が一番の柱石となつた最高の實例である。しかしその勝利は說明出來ないことはない。キリスト教時代の黎明に至るまで人類の間に行はれたる殆んど純然たる生存競爭は二重の性格を生じた。防禦及び征服のために人間を社會及び國家に團結すべく餘儀なくすることによつて、それは一方に於ては組織された集團間の一層物凄い爭ひになつて孤立した個人間の原始的な爭ひに取つて代つたが、他の一方に於ては集團內に於てそれは新なる種類の道德を生じた、それは有効なる協同に必要なる社會的並に市民的道德であつて、例へば服從、正直、自己犧牲、信仰、希望、及び愛である。宇宙的鬪爭過程と並んで、又それと同じ源から發して、倫理的過程が始つた。總ての必要なことは、この新しい倫理思想が普遍化され、宗教と關連され、神是天父、人皆兄弟なりと宣言されることであつた。

しかし、斯る宣言は世界未曾有の精神及び感情の革命を必要とした。ブッダは殆んどこれをなさんとしたが、彼は全くは成功せず、人事からの餘りに完全なる隱退によつて彼の主張を弱めた。後期ヘブライの豫言者等はそのために道を準備したが、彼等は尙排他的民族主義の羈絆に餘りに固く拘束されてゐた人民に向つ

て說教した。キリスト紀元前最後の三世紀の間に小アジア、シリア、エジプト、及びペルシャに發達した宗教――例へばシベレ、アスタルテ、イシス、及びミズラスの宗教――は總てが普遍的宗教であり、總てが友愛的であり、總てが或る程度まで倫理的であつた。同じ時代にギリシア思想と東洋の神秘主義との結合から起つた哲學――例へばゾエノーの禁欲主義とポシドニウスの折衷主義――は精神に於ては世界主義的であり、普遍的な恩惠的な自然法の確信によつて動かされ、訓練及び義務を主張することに於て極めて道德的であつた。

しかし、平和と愛との福音、鬪爭及び自我からの解放の福音、贖罪せられたる人類の連帶責任、及び普遍的な人間と萬人の父なる神との間の更生的天啓の福音を力强く宣言することは、キリスト教の偉大なる教祖及びその最も顯著なる弟子たるタルソスのポーロのために保留された。

七〇、ローマの異教主義　キリスト教の福音が初めて說かれたローマ帝國は、多くの點に於てこれを受容すべく準備され用意されてゐた。一方に於て、ローマ人は無拘束の權力と無制限の富力とから生ずる感覺の快樂を充分に味つた、彼等はそれを味ひ、それが灰燼卽ち虛榮と精神の苦惱とに過ぎないことを證明した。「深き倦怠と飽滿したる欲望」は彼等をして純潔、克己、奉仕、及び聖徒的交通の新方法によつて喜びを求めんとするに至らしめた。他の一方に於て、ローマ人の智力は、ギリシアの科學と東洋の思索とに促されて、その崇拜が共和國時代の先祖の單純な心を滿足せしめたる古き神々――ジュピター、アポロー、マース、及びその他――に對して眞面目な信仰を懷くことが出來なくなつた。古き神々の崇拜は全く政治的であつた。必要なる儀式と犧牲とによつて、ローマ市と神道との親善關係を維持することは政府の一部門の職分であつた。ポンチフェックス・マキシムスの官職は、僧侶ではなく、政治家によつて支持された。「レリジオ」は條約の性質を有する契約であつて、人間には相當の禮式を又神々には立派な擧動を要

求するものであつた。例へば政府がネプチューン（一つの艦隊を難波せしめたる）は契約を履行せずと考へた時は、本來なればそれをも含めねばならぬ祭典から彼の神像をこれ見よがしに削除することによつて彼等の不滿を示した。

古代ローマ人は一見して、人格的な又は倫理的な宗教の必要を感じなかつた。彼等の信仰の最高の對象はローマの都そのものであつて、そのために彼等は生命を投出しても、現世に於ける報償、又は來世に於ける生殘の希望を掛けなかつた。彼等の子孫はこのやうに滿足しなかつた。彼等は罪の感覺と、贖罪の必要と、神との個人的接觸の願望と、永生の欲求とを經驗するやうになつたが、このために東洋の宗教が抵抗し難き魅力を有するやうになつたのである。フリジアのシベレの崇拜は西曆前二〇四年にローマに輸入され、エジプトのイシスの宏大な祭禮はスルラ時代に創始され、又ポンペイの下にペルシアのミズラスの宗教が非常に成功する宣傳事業を始めたので、ミズラ教は帝國の普遍的宗教となるかと思はれた。

キリスト教時代の發端にはローマの異教主義に於ける二つの新なる發達が起つた。第一、政治家はローマに對する古い信仰を皇帝の犧牲の崇拜に人格化することになつてこれを復活せしめんとした、斯くして國家の統一を意味する宗教となし、總ての宗教の信者を團結せしめる結帶となさんとするものであつた。第二に哲學者は帝國の無數の宗教が示したる相剋せる多數の神話をば、皆神の眞理の單一の系統の顯現なりと認めることによつて、これを合理化せんとした。

七一、キリスト教の興起及び進歩　それ故、キリスト教がその存在の最初の三世紀間になさねばならなかつた眞の鬪ひは、古き神々の信者とではなく、皇帝の神性の形式的承認を主張した政治家、及び全體の異教の大系をレネ・プラトニズムによつて解釋し且つ辯護することによつてこれを維持し且つ蘇生せしめんとした哲學者とであつた。

ローマは概して宗教問題に就ては甚だ寛容であつた。ローマはその宏大なる領土の全體に行はれたる種々なる祭祀法や信條の殆んど總てを歡迎し且つ調和させた。キリスト教は最初非常に仁惠的な默認を以て受容され且つ承認された。それは單に從屬せるヘブライ人の民族的宗教なるユデア教の奇矯なる一派なりと思はれた。實際、それはそんなものであつた。初期の信徒等に取つてはキリストはイスラエルを贖ひ且つ復舊させるために生れたる豫期された救世主以上のものでない（それ以下のものでないとしても）と思はれた。キリストがユデアの法律を履行しヘブライの豫言を實現せんがためのみではなく、異教徒が彼等の總ての神話に於て盲目的に模索したる神を彼等に啓示せんがために來れるものなることを知覺したのは、タルソスのポーロ――東洋と西洋との會合點なるシリシアに於て生長したる――の精神的洞察と宗教的天才とであつた。彼は異教徒に向つて彼等の宗教に就て哲學者の加へたものとは違つた解釋を與へ、且つ彼はこれを示すに當つてこれこそ神の啓示なりと權威を以て主張したのである。

ポーロによつてローマの世界――ラテン、ギリシア、アジアの世界――に向つて宣言されたキリスト教は、ユデア教及び東洋の神祕教と併立すべき一つの附加的な宗教ではなかつた。それはそれらの宗教の總てに取つて代り且つこれらを押除けやうとした。それは信徒に向つて皇帝の祭壇を禮拜することを禁じ、パルテノンの神々を惡魔なりと排斥した。そこで異教徒の社會は次第に憤懣と驚愕とを感じ、それが公然の迫害と化したのである。キリスト教徒が異教徒の國家への勤務を拒否してローマ帝國の精神及び生活からは全く違つた教會を組織するに至つて、迫害は强められた。二世紀の間、キリスト教會と異教の帝國との衝突は大きくなり、終には西暦二四九―三一一年の「一般的迫害」と云ふ死活の爭ひとなつた。この爭ひは二つの全然兩立せざる思想樣式及び生活方法間の爭ひであつた。皇帝は、デシウスから後ヂオクレチアンに至るまで、帝國の統一と政治の權威と

を破壞する組織を抑壓するために全力を盡した。「ローマの僧正よりは對立せるシーザーの方がよい」とデシウスは云つた。しかし、僧正背後の勢力は皇帝背後の勢力よりも強いことが解つた。迫害は失敗して、前述の如く、ヂオクレチアンの後繼者は勝利を得たる教會政治と和を結んで同盟した。

七二、教會の勝利　教會が帝國に對して勝利を占めた原因は、ラクタンチウス及び聖オーガスチン時代よりギッボン、ミルマン、シーク及びヂュシェーヌ時代に至るまで、これに興味を有する研究者によつて論究された。世界史家に取つては、その原因は四大集團――宗教的、倫理的、心理的、及び政治的の――に還元され得るやうに思はれる。

先づ第一に、キリスト教はこれと對立せる諸宗教よりは遙かに充分に人類の宗教心を滿足さした。それは宇宙の一層合理的な解釋であつた。それは一層高尚な一層純粹な一神教を教へた。その神是天父の說は、神と人間との關係に就て、ミズラ教及びその他の諸宗教よりも比較出來ない程人心に投ずる比諭を提供した。神の子の權化に關するその啓示は、天地間の大間隙を巧みに接合し、贖罪の信仰と、人格の永生の希望とに、確乎たる基礎を與へた。信者の靈魂を殿堂とする聖靈の存在に關するその宣言は、生を莊嚴ならしめ、他の如何なる源よりも來らざる力を死に與へた。

第二、キリスト教は他の如何なる形式の宗教よりも計るべからざる程高い道德律を有つてゐることを示した。ローマの古い神々は非道德的であつた。東洋の諸宗教の道德は不完全であり、場合によつては非常に腐敗してゐたが、最も純潔なものはミズラ教の道德であつて、それは勇氣、正直、及び忠實の武德を教へた。けれども貞節、謙讓、友情、博愛の一層柔和な神秘的美質を、キリスト教のやうに示した宗教は一つもなかつた。

第三、キリスト教はその高尚な道德の完全なる龜鑑と、最も墮落せる罪人をも

神の聖徒に改めることの出來る力とを、その教祖の人格に於て世界に示すことが出來た。多分、キリストの名によつて行はれた救ひの奇蹟の光景以上に、衰頽せる帝國の罪に飽いた社會に印象を與へたものは、何にもなかつたであらう。聖靈降臨節の日の偉大なる光景は、終局に於て人類の完全なる再生を促すに至つた幾多の精神的變化の最初のものに外ならなかつた。

最後に、信者の團體は相集つて僧正や長老の下に教會を組織し、教會は更に大司教や大教正の下に合同して、終には組織の固い且つ計るべからざる程有力なる教會政治が、シーザーの支配權の内に――それから獨立し、分離し、且つこれに對抗して――發達した。大なる迫害が最初に加へられたのは祕密結社の長としての僧正に對してゞあつた。

第十九章　北方人と遊牧人

七三、北方人の侵入　ギッボンが「ローマ帝國の衰亡」に關する彼の大著述の最後の章に於て到達したる結論は、彼が記述し且つ深く悲しんだところの破局は第一に「僧正と蠻人」とに起因すると云ふことであつた。實際、他の而して一層深い原因――政治的、社會的、道德的、經濟的の――があつたのをギッボンが餘りに無視したのである。それにも拘らず、キリスト教會が必然的に異教徒の帝國を内部から分裂させ、北方の蠻人が外部からその境界に侵入したと云ふことは眞である。しかし、キリスト教徒も北方人も單に或ひは主として破壞的ではなかつた。彼等が既にその目的を果したる帝國を顚覆し、且つ疲弊し衰頽せる文化を撤廢したとしても、それは彼等が力を合せてその廢墟の上に新しい世界を建設せんがためであつた。

前述の如く、キリスト紀元前二千年の間、北方の森林と草原とは絶えず侵入者の群團を南方の日に輝ける文化の上に注いだ。メヂア人及びペルシア人、バルチ

ア人及びアルメニア人、ギリシア人及びラテン人が順次に來つてメソポタミア又は地中海の世界に定住した。これらに續いてケルト語系の諸民族がやつて來た、即ち「ゴール人」は西暦前四世紀にイタリーを襲撃し、エトロスカン人の勢力を破壞することを助け、西暦前三九〇年にローマを劫掠し、終にアルプス山脈とアペニン山脈との間の地方に居を定めたので、この地方は爾來「アルプス以南のゴール」と呼ばれた。次の世紀の間に同種族の「ガラチア人」がアナトリアの高原に定住した。

キリスト紀元より正に一世紀前、南方に對する新なる脅威はシンブリ人及びチュートン人となつて現れたが、彼等はドイツの森林、バルト海の沿岸、及びスカンヂナヴィアの遙かなる荒野から來た北方侵入者の最初の波であつたのである。ローマ人は、新なる蠻人の手によつて重大なる敗北を嘗めた後、帝國を破壞から救ふために全力を注ぐべく餘儀なくされた(西暦前一〇二―一〇一年)。ローマがアルプス以北のゴールを占領し且つライン河を國境とするに至つたのは、西暦前最後の世紀の中葉に於ける北方人の危險を恐るゝがためであつた。前述の如く、オーガスタスはライン河とエルベ河との中間地方を併合することによつてこの脅威を除去せんとしたが功を奏しなかつた(西暦前九年)。北方人の危險は繼續し且つ增加し、歷代の皇帝は防備を堅くし且つ屢々討伐を行ふことによつてこれを阻止するに汲々たる有樣であつた。

七四、新民族　キリスト紀元の最初の三世紀の間益々ローマ帝國を脅迫するやうになつた北方人は、二大部門に分れてゐた。第一、チュートン部門があつて、それにはライン河彼岸のローマ軍團を惱したるフランク人とアレマニ人との二つの聯合、ウエーゼル河及びエルベ河の下流を占領したるサクソン人、エルベ河とヴィスツラ河との間にゐたロンバード人及びブルグンド人が入つてゐた。第二に、ゴート部門があつてその原住地はスカンヂナヴィアであつたと思はれるが、それ

にはバルト海の沿岸に留つてゐたノース人、スウェーデン人、デンマーク人、及びジュート人の外に、廣汎なる地域に亘つて漂泊し、キリスト紀元の初期に於てローマ領のダニューブ河及び黑海境界に迫つたゴート人、ゲピデー人、及びヴァンダル人が入つてゐた。ヂオクレチアンが政廳をニコメヂアに移し、コンスタンチンが新ローマを建設したのは、半ば彼等の脅威に對應するためであつた。西暦三世紀に於けるゴート人のバルカン半島及びアジア侵略は極めて破壞的であつた。

新なる侵入者等は雄大にして尙武なる人種に屬してゐた。彼等は長軀にして毛色の薄い長頭の武人であつて、自由を愛する熱情と、强い個人主義と、倦むことを知らざる精力と、敏捷なる智力とを以て知られた。彼等の社會的並に政治的組織は民主的であつて、彼等は更に代議制度を發達せしめた。彼等は僧侶の支配に對してはローマ人やケルト人よりも遙かに反感を有つてゐた、況んや東洋人や衰頽期のギリシア人の迷信に對してをや。彼等の家族生活は堅固にして比較的純潔であつた。

彼等はローマの國境を破るよりも遙か以前に、地中海文化の影響を受けるやうになつた。一方に於て、ローマ人は減少したる軍隊を補充するために募兵を彼等に求め、更に帝國內の疫病のために荒廢したる地方に定住して耕作者となるやうに彼等を奬勵した。他の一方に於て彼等は、彼等との間に廣汎なる商業を樹立したる商人と、殊にゴート人の間に若干の顯著なる成功を收めたるキリスト敎の宣敎師とによつて訪問された。殊に、ライン河、ダニューブ河及び黑海附近に住したる北方蠻人の一部は、西暦四世紀の危機が起つた時には速かにローマ化され且つキリスト敎化されるやうになつてゐたのである。

七五、遊牧人の侵略　西暦四世紀の危機は遊牧人によつて促進された。少許らくの間アジア草原の遊牧人は不穩且つ脅迫的であつた。彼等特殊の動搖の原因は不明であるが、最も一般的に推考される二つの原因は、一方に於ては人口の增加

であり、他方に於ては中央アジアの漸次的乾燥によつて彼等の家畜のために充分なる牧草を見出すことが不可能となつたことである。それは兎も角、西暦三七二年頃ハン人と云ふ名で知られてゐる彼等の大群が、黒海とウラル山脈との間に開かれてある大なる「民族の門口」を通り、ヴォルガ河を渡つて、東ヨーロッパの諸民族に殺到した。彼等の數、彼等の殘忍、彼等の馬術、彼等の射術、彼等の突擊の兇暴は、彼等を恐るべきものとなし且つ少許らくは向ふところ敵なからしめた。

最初彼等はコーカサス山脈の北に往んでゐたインド・ヨーロッパ人の一種なるアラン人を襲つた。彼等は多くの人を殺し、更に多くの人を奴隷となし、殘餘の人を驅つて西の方サルマチアを通つてドイツに潰走せしめた。彼等の次回の攻擊は黒海の北岸を占領したる東ゴート（オストロゴート）人と、下流ダニューブ河今のルーマニアに住したる西ゴート（ヴィジゴート）人とに對してなされた。これらの好戰的な民族すらも遊牧人侵入者の旋風のやうな襲擊を防ぐことが出來なかつた。東ゴート人は大部分征服されてハン人と共に西の方「ハンガリー」及びパンノニアに伴はれた。西ゴート人はローマ人に服從と國境防備の援助とを約して、ダニューブ河を渡る許を得た。西暦三七六年に運命的な許しが與へられた。二年後、ハン人の禍が過去つた時、西ゴート人は謀反し、ローマの大軍をアドリアノープルに破つて、ニュー・ダキア、モエシア及びトラキアを支配するに至つた。帝國のダニューブ河境界は征服された（西暦三七八年）。

西暦四〇六年にライン河境界に對する壓迫が強くなつて最早防ぎ切れなくなつた。アラン人、ヴァンダル人及びスエヴ人が群をなしてこれを突破し、三年間ゴールを劫掠して、それからスペインに入つた。帝國は彼等を驅逐することが全く不可能であつて、終に彼等と和して彼等の定住を許さねばならぬことゝなつた。しかし、西暦四五一年に、古いローマ人も新しい北方人の定住者も共に共通の滅

亡に瀕した、それはハン人が彼等の王アッチラの下に再び動搖してライン河を渡つてゴールの平原を掃蕩したからである。危急の禍はラテン人とチュートン人との顯著なる聯合を誘起し、帝國の軍團と蠻人の部族とは相合して西洋文化をシャロンの大戰場に於て救はんとしたのである。

七六、中世キリスト教世界の形成　西暦四五一年シャロンに於けるアッチラ及びハン人の決定的な重大な敗北に續いて、イタリーに於ける短期間の侵略の後、アッチラが死んで彼の帝國が分裂した(西暦四五四年)。パンノニアの東ゴート人は、就中、獨立を回復してヨーロッパに於ける一勢力たらんとするに至つた。

北方人の侵入によつて必要とせられたる新なる境界線に於けるローマ帝國の再定住を妨げる外來の干渉は最早來なかつた。五世紀に於て(西暦三九五—四七六年)帝國の重要なる行政的區分が行はれ、アドリア海が大體の分界線となつた。東の方、ギリシア及び東洋諸州は、コンスタンチノープルを中心として組織され、鞏固な成功せる政府が樹立されて、それが多くの浮沈を經て西暦一四五三年まで繼續し、蠻人を驅逐し防止して、多くの攻擊者に對抗してキリスト教を擁護し、古代文化の炬火を燈やしつゞけた。西の方では、ラテン及びケルト諸州がイタリー(普通ミラン及びラヴェンナ)を首府とせる政府の名目的支配の下に置かれた。けれども總ての實權は速かに北方人定住者の手に歸し、西暦四七六年(傀儡皇帝ロムルス・アウガスツルスの廢位を以て)西方に於ける帝國の支配は終つた。

西ローマ帝國の後に起つた主なる北方人の王國は次のやうなものであつた。(一)西ゴート人は各地を漂泊してその間にイタリーを劫掠し且つ(西暦四一〇年)ローマを掠奪したる後、スペインに最後の住地を見出した。(二)ヴァンダル人はスペインから驅逐されてアフリカに移住しカルタゴを本據とした(西暦四三九年)。(三)東ゴート人は偉大なる彼等の王テオドリックの下にパンノニアを去つてイタリーを征服しパヴィアを首府としてこれを治めた(西暦四九三年)。(四)フラン

ク人は既にネーデルランド地方に定住してゐたが、西の方に發展して終にクロヴィス（西暦四八一—五一一年）の下に西は大西洋南はピレネー山脈に至るまで領土を擴張した。（五）ブルグンド人はローヌ河の流域に定住した。（六）アングル人、サクソン人及びジュート人は下流エルベ河地方から起つてローマが廢棄したるブリテン州を占領するやうになつた（西暦四五五年以後）。

けれども、ローマの政治は過去つても、ローマの傳統は西方に於て依然として有力否優勢であつた。蠻人の首長や王は普通ローマ皇帝——西暦四七六年まではラヴェンナその後はコンスタンチノープル——の形式的宗主權を認め、皇帝から帝國の稱號や官職を受けて、統領や貴族の禮服を着用することを喜んだ。斯くて次第に、精神的權威としてのローマは、その力と威信とを回復し、新興の蠻人の諸王國の上に中世キリスト教世界の堂々たる統一を印象せしめたのである。

第二十章　キリスト教世界とモハメッド教世界

七七、法皇政治の興起　中世キリスト教世界の統一的中心はローマ法皇政治であつた。

前述のやうに初期の教會をして異教帝國の力に挑戰してそれを破ることを得しめた力の源泉の一つはその組織であつた。長老管轄區、僧正管轄區、大教正管轄州、大司教管轄區は、帝國の組織そのものゝやうに密接に結合せられたる諸制度の階級制度を構成した。實際、教會は帝國の組織に順應したのであつて、今日でも、總ての變化にも拘らず、ヨーロッパの教會地圖は歴代シーザーの領土の區分を驚くべく想起せしめる。

帝國に於ては總ての道路はローマに通じた、總ての行政的活動はローマから放

射された。實に、この永遠の都府は單なる政治の中心及び首都より遙か以上のものであつた、それはヂオクレチアン時代に至るまで帝國の組織が原始的都市國家のそれであつたゝめであつて、宏大なるコスモポリタン的世界の要求には餘りよく合はなかつた。實際、ローマの公民權はその市の部族の一つへの編入を意味した。誠に、帝國そのものがローマの膨張したる市外に外ならなかつた。そこでローマの教會は最初から首府の教會としての特殊なる重要性を獲得したのであつて——この教會に皇室の人々が加はり、その僧正が初期の迫害の難局に當ることを要請せらるゝに至つて、この重要性は大きくなつた。

ローマ教會及びその僧正の卓越するに至れるこの政治的原因は、一層明瞭に宗教的な性質の影響によつて補はれた。殊に、(一)ローマ教會が聖ピーターによつて創立され、彼がその初代の僧正であつて、彼の權威を彼の後繼者に傳へたと云ふことが早くから信ぜられるやうになつた、(二)使徒の創建を誇る他の教會——エルサレム、アンチオク、アレキサンドリア——は總て異端に薫染して鬪爭に引入れられ、總てが最後に異教徒に滅されて、ローマ教會一つを殘した、(三)ローマはその正統たることの傳說と、その安定と、その訓練と、その權威とによつて益々有名になつた、そこで(四)地方の教會から帝都の僧正の使徒的審判を仰ぐために陳情する慣例は次第に增加して承認されるやうになり、最後に(五)野蠻なる北方人が帝國に侵入して各地に王國を樹立するに至つて、ローマの僧正が彼等に宣教師を派遣して彼等を異教又はアリウス派の異端からカトリック教に改宗させることゝなつた。

しかし、東部キリスト教世界はローマにこの高き地位を與へやうとしなかつた。コンスタンチノープルに君臨した歷代の皇帝は彼等自身が國家と同じく教會にも最高のものなりと主張した。彼等の要求と法皇の要求との衝突は、西暦一〇五四年に完成されたギリシア教會とラテン教會との分裂の主因であつた。

七八、ビザンチウムとペルシア

コンスタンチーノプルを首府とせるローマ帝國――別稱ビザンチン帝國――はその歴史の初めの數世紀間、內憂外患によつて大いに惱まされた。その主たる困難は東方にあつた。一方に於て、その東洋諸州卽ちシリア及びエジプトは皇帝の支配の下に安んぜず、政治的分離と、宗教的反抗とによつて獨立の希望を表示した。他の一方に於て、復活したるペルシア王國（六七を見よ）は絕えずユーフラテス河の國境を侵して次第に小アジアを劫掠するやうになつた。

皇帝ジュスチニアン（曆西五二七―五六五年）はビザンチンの君主中最も偉大なるものゝ一人であるが分離と異端とを壓抑し且つ彼の東方の防備を强くするために全力を盡した。けれども、不幸にして、北方の侵入者に蹂躙された西方の國土の若干を回復せんとして、彼はその本來の仕事を怠つた。なる程、彼はアフリカのヴァンダル王國（西曆五三三年）及びイタリーの東ゴート王國（西曆五三五―五五三年）を滅し、更に、南部スペインの一地方を占領することに成功したけれども、このために國力を疲弊させ、その死するに及んで彼の國は四方に敵を受けて孤城落日の觀を呈するに至つた。

ローマとペルシアとの爭ひは七世紀の初めに至つて頂點に達した。西曆六〇六年にはペルシア軍が國境を破つてシリアを劫掠した。翌年には小アジアが蹂躙されコンスタンチノープルはこの都とカルシドンとを分つ一葦帶水によつて纔かに救はれた。ダマスコスは西曆六一三年、エルサレムは西曆六一四年、アレキサンドリアは西曆六一六年に占領された。ローマ帝國は將に滅されんとした。しかるに西曆六二一年に形勢が一變した。數年來周到なる準備をしてゐた有能の皇帝ヘラクリウスが一大强襲を加へた。彼はペルシアからそれが占領したる總てを回復したのみてはない。彼は敵の本國に征入り、ペルシアの最後の大軍をニネヴェの故地に破り（西曆六二七年）、國王を退位させ、新王に苛酷なる媾和條件を示した

（西暦六二八年）。それは刮目すべき勝利であつた。

しかし四分の一世紀の殘忍なる戰爭は敵身方共に疲憊せしめた。彼等の軍隊を解隊しつゝ彼等は長い平和時代に於て回復を計らんとした。けれどもその機會は何れにも拒まれた。傳說によれば彼等は戰爭を止めたその年に、その時まで彼等の何れにも知られなかつたモハメッドと云ふものから、降伏を要求する手紙を受取つた。この傳說の眞僞は兎も角、當時モハメッドがその注目すべき生涯の終りに近づいてゐたこと、及びアラビアが將に世界史の潮流を全然新なる方向に轉換せんとしてゐたことは確かである。

七九、モハメッドとモハメッド敎世界　アラビアは中央アジアのやうに遊牧人の一大故鄕――人種の貯水池である。それは又中央アジアのやうに氣候の變化を受けやすいために、漂泊的遊牧人を生活させる能力に大なる高低がある。永い間相次で新月沃地に國を建てたセム族の諸民族――カナーン人、アッカッド人、バビロニア人、アッシリア人、フェニシア人、ヘブライ人、カルデア人、及び多くの他のもの――が古代に於てアラビアから現れた。古代セム族の優勢は西暦前六〇六年に於けるニネヴェの破壞及び西暦前五三八年に於けるバビロンの塡覆と共に過去つた。約十二世紀の間アラビアは眠れる火山のやうに休止してゐたが、今や再び噴火せんとするに至つた。

アラビアの政治的弱點は常に統一のないことであつた。內部の草原及び砂漠の遊牧人が多くの相爭へる部族に分れてゐたばかりでなく、紅海及びインド洋の耕作された海岸に住んでゐた一層定住的な文化的な諸民族に對しては、總てが等しく敵意を有つてゐた。キリスト紀元七世紀に、豫言者モハメッドはアラビア人世界の總ての斷片を宗敎的熱情の激しい統一の中に融合させ、彼等をして征服の大壯圖に上らしめた。モハメッド敎の神學は單純であつた。それは神の統一と主權、豫言者の靈感と權威、信者の側に於ける絕對的忠順及び服從の義務、篤信者に對

しては現世の幸福が永久なるべきことを敎へた。その道德は高かつた、卽ちそれは節制、深切、克己、忠誠を敎へた。しかし、それは著しく軍國的な信條であつた。戰爭はその宣傳の常套手段であつて、被征服諸民族は改宗か貢稅か劍戟かを選ばねばならなかつた。

モハメッドの宗敎改革者としての經歷は彼が四十歲の時（西曆六一〇年）に始つて彼の死の時（西曆六三二年）まで續けた。彼の大功業はアラビアの統一であつた。アラビア人の帝國の建設は彼の後繼者の事業であつた。二十年（西曆六三二—五二年）だけでペルシア王國を全滅させ、その總ての領土を併合することが出來た。同じ時代にシリア及びエジプトがローマの支配から奪はれ、エルサレムは西曆六三七年、アレキサンドリアは西曆六四一年に陷れられた。半世紀の休息の後カルタゴが占領され（西曆六九八年）アラビアの領土は西の方ジブラルタル海峽まで擴がつた。西曆七一一年にはスペインが侵入され（北方の山岳地方を除いて）容易に衰殘の西ゴート人の手から征服された。八世紀の初めに於けるキリスト敎世界に取つての最高の問題は、東の方では小アジアとコンスタンチノープルとがアラビア人に對抗することが出來るか、西の方ではフランク人がアラビア人の發展を阻止することが出來るか、と云ふことであつた。

八〇、十字軍への豫備行爲　西曆七一七年にアラビア人は大軍を起し、シリア、エジプト及びアフリカの艦隊と共に、コンスタンチノープルを攻圍し、激戰の後この都府はその皇帝イソーリアのレオの天才と決斷とによつて救はれた。西曆七三二年にはスペインを征服したるモハメッド敎徒がゴールに侵入し、ツールの天下分目の戰場に於て彼等はチャールス・マルテル麾下のフランク人に擊退された。キリスト敎世界は滅亡から救はれた。

八世紀の中頃までにはアラビア人は彼等の範圖の制限に達した。西曆七五〇年以後間もなく、分裂と衰頽との最初の徵候が現はれ、スペインは分離して西方に

獨立の「コルドヴァのエミル王國」を樹てた。しかし、東方に於ては、新都なるチグリス河畔のバグダッドから更に二世紀の間（西暦七五一―九五一年）、カリフ――モハメッド教世界の精神的並に政治的君主――が廣汎且つ強大な權力を振つた。彼等カリフは立派な宮廷を營み、ペルシア及びローマの文化を吸收してこれを助長し、彼等の宗教的情熱を緩和し、彼等のキリスト教徒たる臣民と寛容の氣分を以て共に生活し、エルサレムへの巡禮を歡迎し商業を奬勵した。偉大なるハルーン・アル・ラシッドはシャレーマンの親友にして又同盟者であつたが、シャレーマンはフランク人の王にして西部キリスト教世界の大部分の統治者であつたのである。

西暦九五一年にカリフ帝國は分裂し、ペルシア、メソポタミア、シリア、エジプト、アフリカは別々のモハメッド教國となり、兄弟相殺的の戰爭を始めた。この事態は中央アジアからの新なる遊牧人の侵入を將來した。夙に十一世紀に於てセルジューク・トルコ人はオクソス河を渡りモハメッド教を採用して、軍人としてカリフに仕へることを許された。彼等は間もなく（西暦一〇五八年）自らバグダッドの主人となり、カリフからその總ての政權を奪つてこれをスルタンと稱する彼等自身の首長に與へた。西暦一〇七一年に彼等は小アジアを征服してビザンチン帝國に致命傷を與へ、西暦一〇七五年にはシリアを平定しエルサレムを占領した。

セルジューク人の進出によつてモハメッド教とキリスト教との平和的交通の時代は終つた。三百年間決定されてゐた二大宗教の境界は再び攪亂された。バグダッドのカリフ政廳の宗教的寛容に代つて新に改宗したる狂信家（セルジューク人）が迫害を事とした。エルサレムへの巡禮は侮辱と壓制との甚しい物語をヨーロッパに持つて歸つた。そこで十一世紀末以前に、ビザンチン帝國を滅亡から救ひ且つ聖地を異教徒から奪回すべしとの檄が西部キリスト教世界の全體に飛ばされた。

十字軍は始つたのだ。

第四篇參考書

Bailey, C. (editor). The Legacy of Rome.

Bell, M. I. M. Short History of the Papacy.

Gilman, A. The Saracens.

Glover, T. R. Conflict of Religions in the Roman Empire.

Heitland, W. E. The Roman Fate.

Huntington, E. The Pulse of Asia.

Jackson, F. J. F. History of Christianity, 590-1314.

Matheson, P. E. The Growth of Rome.

Oman, C. W. C. The Byzantine Empire.

Pelham, H. F. Outline of Roman History.

Thorndike, L. History of Mediaeval Europe.

第五篇　文藝復興と宗教改革

第二十一章　中世のキリスト教世界

八一、フランク王國　十一世紀の終りに西部キリスト教世界はセルジューク・トルコ人のために滅亡せんとする東部キリスト教世界を救ひ、パレスタインの聖地を異教徒の支配から援けることを要請された。

この前西部キリスト教世界を觀察した時（七六—七七）それはローマ帝國組織の廢墟に樹立された北方人の多く王國——西ゴート、ヴァンダル、東ゴート、フランク、ブルグンド、イギリス——から成つてゐたが、これらの諸王國は前述の如く、半ばローマの傳統により、又特に法皇政治の活勢力によつて、次第に眞の統一を與へられた。

北方人諸王國の定住より彼等が十字軍に出陣するまでの五世紀間（大體西暦六〇〇—一一〇〇年）に、若干の顯著なる變化が西ヨーロッパに起つた。前述の如く、ヴァンダル人と東ゴート人とはジュスチニアンに滅され（七八）、西ゴート人はアラビア人に平らげられ（七九）。イギリス人とフランク人だけが後に殘つて榮えた。イギリス人は地球の端に位置せる島國の内に於て孤立の存在をなし、世界史の潮流にはまだ殆んど影響するところがなかつた。

フランク人は大いに事情を異にした。夙にカトリック派のキリスト教に教宗し、法皇廳から大なる援助をえたる彼等は、その領土を擴げて終に西暦八〇〇年までにはヨーロッパ大陸の大部分を支配するに至つた。彼等は自らゴールの主人となつて、ブルグンディーを侵略し、東の方ドイッに發展して、嘗てはシーザーの軍團を擊退したる地方にキリスト教文化を植えつけ、更にスラヴ人とアジア系のア

ヴァール人とを平定し、北部イタリーをロンバード人から征服し（ロンバード人は許らくの間――大體西暦五六八―七七四年――前に東ゴート人が驅逐された地方を占領してこれをを支配してゐた）、更にモハメッド教徒をエブロー河以北の總ての地方から驅逐することによつてスペインをキリスト教徒の手に奪回することを始めた。

フランク王國はチャールス大帝（シャレーマン）西暦七七六―八八四年の下に於てその威勢の頂點に達したがシャレーマンはツールの野に於てアラビアの大軍を擊退したるチャールス・マルテルの孫であつた。彼は大いに領土を擴張したばかりでなく卓れたる行政制度によつてその領土に顯著なる政治的統一を與へた。更に、彼は有名なる教育家であり學藝のペトロンであり、教會の擁護者であり、主戰的な宣教師であつた。法皇が長い間西ヨーロッパに廢れてゐた「ローマ皇帝」の稱號を與へたのは彼れであつた（西暦八〇〇年）。

八二、神聖ローマ帝國　西暦八〇〇年に於けるチャールス大帝の戴冠による西ローマ帝國の名目的復活は、中世史上の最も奇妙な且つ顯著な事件の一つであつた。それはローマの傳統の永續性と法皇廳の勢力とを顯然と例證するものである。

前述の如く（**七六**）西暦四七六年に於けるロムルス・オーガスツルスの廢位は、理論的には全ローマ皇帝の權力がコンスタンチノープルに都したる君主の手に再び集中されたことを示すものに外ならなかつた。前述の如く西部の蠻人の諸王は世界の正統なる主君から帝國の官職のしるしを受けることを熱心に欲した。更に前述の如く（**七八**）皇帝ジュスチスアンは單なる形式上の權威に滿足しないで、失はれたるラテン諸州に對して有效なるローマの支配權を回復せんと企て、短期間それに成功した。

ジュスチニアンがイタリーの東ゴート王國を滅したことは、若干の重要なる且

つ主として禍ひなる結果を生じた。西暦五六八年にロンバードの蠻人はジュリア・アルプス山を超えて全平野に定住せんとするに至つた。しかし、彼等は全然イタリーを占領したのではなく、彼等は防壁ある都市を略取する手段を有たず、又餘りこれを取らうとは欲しなかつた。斯くてヴェニス、ネープルス及び就中ローマのやうな場所は、彼等の手に渡らず、名目的には依然ビザンチン皇帝に從つてゐた。しかし、ビザンチン皇帝は東洋諸州の叛亂と東方國境の防備とに煩はされてゐたゝめに、そのイタリーの臣民には何の奉仕をも出來なかつた。更に、ビザンチン皇帝及び彼が支配してゐた東方教會は、恐るべき異端と破壞的な分裂との渦中に投じたゝめに、コンスタンチノープルに從つてゐることは終に法皇廳に取つて耐へがたきものとなつた。そこで西暦八〇〇年に法皇レオ三世は、半ばビザンチンの權力の完全なる排斥を示すため、又半ば、イタリーに於ける有效なる政治的支配者の保護を得るために、彼の忠誠をクリスマスの日にギリシア人からフランク人に移すと云ふ劇的な行動を取つたのである。

斯やうにして法皇廳によつて創造された「神聖ローマ帝國」は制度よりも寧ろ觀念であつた。それは關係者の想像の中に一つの幻影として存在したのである。しかし、この幻影はフランク人の精神の健全に取つて致命的であつた。それはシャレーマン自身及び彼の後繼者をドイツを統治する大事業から引離して、無用なるイタリー遠征を行はしめ、空しく世界的領土を求めしめた。

八三、封建制度　シャレーマンの世界は殆んど單純と、安定と、安全とを達成するやうに見えたものであつた。インドの境界から大西洋岸に至るまで四大國——二つはキリスト教の國で、二つはモハメッド教の國——が人類の文化的部分を包擁してゐた。これら四國の間には、巧に調整された均勢によつて平和が維持されたのであつて、神聖ローマ帝國とバグダッドのカリフ帝國とはこれに敵對するビザンチン帝國とコルドヴァのエミル王國とに對峙してゐた。宗教的情勢が政治

的平靜を破ることはなかつた。

しかし、西暦八一四年に於けるシャレーマンの死後間もなく、雲は再び北方にわだかまり、蠻族の新なる暴風雨――今までの中最も猛烈なものゝ一つ――がキリスト教世界とモハメッド教世界とに等しく襲つて來た。北方人と遊牧人とが同時に信心なる南方を襲つて、二世紀の間廢頽と破壞とを事とした。若し何れかの時代が暗黑時代と呼ばれることに値ひするとするならば、それは西暦八五〇―一〇〇〇年の時代であつた。

コーカサス山脈からカルパチア山脈に至る境界を襲つた遊牧人の多くの群團の手で最も有力なのはマジャール人であつたが、彼等はダニューブ河流域を溯り、ドイツ及びイタリーを劫掠した後で、終にハンガリーに定住した。新なる北方人の侵入者は恐るべき海賊であつて、彼等はスカンヂナヴィアの小灣からキリスト教世界を總ての方向から掠奪した。彼等は獰猛なる異教徒であつて教會及び修道院に對しては最も亂暴を働いた。彼等はイギリスを襲擊して終にテームス河とテイン河との間の全海岸を占領し、オークネー、シェットランド、ヘブリデス及びファローの諸列島を奪取し、アイスランド及びグリーンランドに植民し、更にアメリカに達した(西暦一〇〇〇年)。彼等はフランク人の大帝國を分裂せしめ、その境界内の列る處に計るべからざる損害を與へた後で、ノルマンディーに定住した(西暦九一二年)。東の方にも亦、彼等は道を進め、バルト海と黑海との間のスラヴ系諸民族の上に權力を樹立し、斯くてロシア王國を建設した。

シャレーマンの後繼者等は當時この禍ひを防ぐことが全く出來なかつた。彼等は弱い人間であつて、僧侶に左右され、血族の不和と内亂とに困惑してゐた。彼等が君臨したる帝國は總ての眞の統一を缺き、更に王室の各成員に權力を分配すると云ふフランク人の馬鹿氣た慣習によつて分裂された。

九世紀に於ける總ての中央權力の一般的消滅に際して、キリスト教世界は、そ

の滅亡を免れるために、それ自身を封建的に組織し且つ擁護せねばならなかつた。城と防壁ある都市とは到る處に現はれ、無援の自由民は地方の諸侯に服從して、彼等の保護を受付ける代りに彼等に出仕したので、政治の權力と責任とは多數の小諸侯と寡頭政治的都市とに分割された。

八四、十字軍　封建制度は九世紀及び十世紀に於て西部キリスト教世界に殺到したる異教徒の侵入から疑ひもなくこれを救つた。けれどもキリスト紀元一〇〇〇年までにはその危險は過去つた。海賊の劫掠は止んで、イギリスの「デーンロー」又はフランクの「ノルマンディー」に定住したやうな侵略者は洗禮を受けて、キリスト教文化を受入れた。遊牧人たるマジャール人も亦その漂泊を止めて、法皇廳に屈伏し、ハンガリー王國として、キリスト教諸民族の仲間に加へられた。

二百年間ヨーロッパを覆つてゐた雲は消失せ、暗黑時代は終り、新にして豐かなる生命の光と悅びとは全キリスト教世界に現はれ始めた。ローマ人とチュートン人とは終に調和され混合されて眞の中世人となつた。文學は回復した、法律は發達し始めた、新なる諸制度は出現した、新奇の思想は思想家の心の中に動き出した、神學はその思辨を擴大した、哲學は再現した、就中、藝術がその頭を擡げて立派なゴシック建築が中世的憧憬及び理想の眞の壯大さを啓示するやうになつた。

異教徒に對抗するためにビザンチンから援助が求められ、聖地の求援がなされたのは、この再び平和に歸し、再び調和され、再び若返つた冒險を好むキリスト教世界であつた。無爲に苦しんで光榮と權力とを熱心に求めてゐた封建諸侯、東洋の商業を獲得せんと焦慮せる新興の都市、農奴的夫役の束縛から免れやうと希望してゐた農民、殉教の利益を熱心に求めてゐた敬虔なる巡禮、彼等の信仰の搖籃地を回收し、東部地中海の使徒創建の大司教監轄區を回復して、世界的教界の永い間分れてゐた斷片を再び統一せんとの野心に滿ちてゐた法皇及び高僧に取つ

ては、東方の要請は抵抗しがたき光明をもたらした。

十字軍への要請を初めて聞いたのは偉大なる法皇グレゴリー七世（ヒルデブランド）であつて、ビザンチン皇帝が西暦一〇七三年に彼に緊急の求援をなしたのであるが、それはマンチカートの敗戰後から二年後であつた（八〇を見よ）。彼はこれに應ずるために全力を盡したけれども、彼は封建制度との爭ひ（所謂僧職敍任式の論爭）に沒頭してゐたゝめに、これに成功しなかつた。一層成功せる求援は西暦一〇九五年にウルバン二世に向つてなされた。彼は二大宗教會議を召集したが、その結果として、西部キリスト教世界は滿場一致の熱心を以て奮つて東洋遠征の軍を起した。

第二十二章　文藝復興の先驅者

八五、十字軍の影響　十字軍の詳細に立入ることは不可能でもあり不必要でもある。十字と新月と、西洋と東洋と、ヨーロッパとアジアと、北方人と遊牧人との間のこの大きな爭ひが約二世紀——西暦一〇九六——一二九二——の間續いたことゝ、そしてこの長い時代の最後に於てすらもそれは單に停止されたのであつて終結されたのではなかつたことゝを云ふにとゞめる。少くともその後三世紀の間、聖地の回復は比較的偉い法王達の政策に於ける一つの基本原理であつたのである。陸路又は海路によつて東方に到つた總ての遠征の中で、初めの數回だけが部分的にでも成功した。西部小アジアからはトルコ人が一掃された（西暦一〇九七年）。エルサレムは西暦一〇九九年に占領されて、はるか北方アンチオクとエデッサとに前哨を有する一つのキリスト教王國が建設された。けれども唯八十年間だけそれは傷けられたそして悲慘な存在を辛うじて續けることが出來たのであつて、西暦一一八七年にそれは强大なるサラヂンによつて容易（たやす）く滅されたのである。愈々減少する熱心と益々增大する射利心とを特色とする後期の何回かの十字

軍は、皆多少とも災難であり、また不名譽で、失敗でさへもあつたのである。

にも拘らず、これらの不思議なそして典型的に中世的なる遠征は、西洋文化の上に深刻且つ遠大な影響を及した。(一)それらはビザンチン帝國にも一度生命を吹込み、長年月の間、卽ち西曆一四五三年まで、モハメッド教を阻止するの力を與へた。(二)それらは大軍を教會の指揮の下に置き、國王と皇帝とに政策を指示するの力を高僧に與へて、それらの繼續中二世紀の間著しく法皇政治の勢力を增加した。(三)それらは神の道の弘通を暴力、流血、掠奪及び詐欺と組合はせることにより、尙又罪の赦しを心の變化と生活の改革とにではなく軍隊的服從の業に立脚させることによつて、キリスト教を墮落させ且つキリスト教社會を腐敗させた。(四)それらは西洋の半野蠻的な武士を彼等自身の文化よりは比較出來ない程高く發達せるギリシア及び東方の諸文化と接觸させ、斯くて思考と想像とに力强い刺戟を與へた。(五)それらは東洋と西洋との間の通商と通信とを再開して、著しく兩者の富を增加した。(六)それらは封建的貴族を沒落させ、中世都市の最大なるものゝ多くを勃興させ、そして最後に、それらの失敗と停止とによつて、僧侶の信用を奪ひ且つ强大なる近世君主諸國の恐るべき下地を造つたのである。

八六、ラテン文藝復興　十字軍の永久的影響の中で、智的方面に現はれたる影響より重要なものはなかつた。

西方に於けるローマ政治の消滅に續いた七世紀(大體西曆五〇〇—一二〇〇年)の間は、學問の炬火は教會の諸々の學校によつて幽かに光を保たれて居つたのであつて、それらの學校では僧職に就くものゝために、單調で變化のない三學(文法學、修辭學、論理學)を教へ、尙稍々專門的な四學(算術學、天文學、幾何學、音樂學)を以てこれを補つたのである。シャレーマン時代の短期間の學術の勃興は北ヨーロッパの海賊とマジャール人との侵入によつて速かに果敢なき終りを告げた。東方のビザンチンに於ては古代學藝の一層充實せる流が止まずに續いてゐ

た。ギリシア語が保全されたゝめに、ギリシアの文學、科學及び哲學の寶庫がコンスタンチノープルの學者達に開放されてゐた。實際のところ、ビザンチンの學者は彼等が傳授を受けたところに何ら追加する力を有たなかつたけれども、彼等は後世に傳ふべきギリシア古典の寫本を增加することに於て一つの有用なる職分を果したのである。けれども、力强い學問の復興が始つたのは、殊にバグダッドカリフ帝國盛時（西暦七五一—九五一年）のモハメッド教國に於てゞあつた。この復興に際して用ひられた言語はアラビア語であつたが、これを用ひた學者は大部分アラビア人種ではなく、征服されたエヂプト人、シリア人、ペルシア人、ユデア人であつた。彼等はヘレニスティック文化の遺物を結合して、殊に科學、數學及び哲學の方面に於てこれを發達させるやうになつた。

アラビアの學問は三本の道を通つてキリスト教世界に到達した。第一の通路は、モハメッド教徒領のスペインの諸學校であつて、ガーバート（法王シルヴェスター二世）のやうな篤學の僧侶は自分の靈魂の救濟を睹してもそこに行かうとした。第二の通路は二百年間（西暦一〇六〇—一〇九〇年にノルマン人に征服されるまで）モハメッド教徒の手にあつたシシリーである。第三の通路は聖地及びエジプトであつて、そこでは十字軍に加はつた巡禮、武士、及び商人輩が、彼等自らの文化より遙かに高い文化を見て驚かざるをえなかつた。

東洋と西洋との新なる接觸は十二及十三紀の所謂ラテン文學の復興を誘起した。それは偉大なるヨーロッパ諸大學の創立、スコラ神學及び哲學の發達、及び概して抑壓し難き多くの異端的宗派の擡頭によつて特色づけられた。それは前述の建築界の復興を刺戟し、且つローマ法の復活を助けることにも與つて力があつたのである。

八七、蒙古人の侵入　十三世紀は中世キリスト教世界の時代が絶頂に達した時である。それは聖フランシス、聖ドミニック及び法皇の中で最も權威の有つた法

皇インノセント三世を以つて始つた。その全盛期は國王中最も仁慈なるフランスの聖ルイ、コスラ學者中最も偉大なる聖トーマス・アクァイナス、及び世界の驚異たる皇帝フレデリック二世の經歷を以て顯著であつた。それは中世的天才の現化たるダンテ、及び法皇的王者の最後なる法皇ボニフェース八世を以て終つたのである。

この世紀の進行は異常なる意義を有する多くの運動と事件とによつて著名になつた。イギリスでは大憲章、議會の發達、及びエドワード一世の改革が立憲政治の發達を表示した。フランスでは王權が封權的分裂に勝つて、國民的統一に向つて速かに進歩を始めた。スペインではキリスト教諸國が終にモハメッド教徒の勢力を破つて、半島の一小部分を除く全部をキリスト教に回復した。ドイツ及びイタリーでは激烈なる爭ひが法皇廳と神聖ローマ帝國との間に行はれた。神聖ローマ帝國は法皇廳が創造したものであるが、我儘で不從順になつてゐたのである。

この爭ひの中途に於ける（西暦一二五〇年）皇帝フレデリック二世の死はキリスト教的並に普遍的制度としての帝國の消滅を表示したのであつて、西暦一二七三年にハプスグルグ家のルドルフを皇帝としてそれが復活した時には、それは單に誤つて名づけられたるドイツの民族國家であつたのである。

けれども世界史の見地からは、この注目すべき世紀の終りの出來事の中で恐らく最も重大なるはジンギスカン及びその後繼者の短命とは云へ偉大なる蒙古帝國又は韃靼帝國の建設であつた。ジンギスカンは名義上支那皇帝に隷屬しバルカシュ湖とバイカル湖との間の中央アジアを漂泊區域としたる一部隊の漂泊人の長であつた。彼は初めに獨立を宣言し、續いて遠く裏海に至るまで總ての漂泊人の上に彼の權力を樹立し、終に西暦一二二七年彼の死ぬ前に北支那を征服したのである。彼の後繼者オグダイカンは支那の征服を完成し、次で西に向つて、大軍を率ひてヨーロッパを襲つた。五年間に（西暦一二三五—一二四〇年）彼はロシアを平

定して、スラヴ人の上に蒙古の支配を打立てたが、それは二世紀半の間繼續した。西暦一二四一年に彼はポーランドを劫掠し、翌年にはハンガリーに侵入せんと準備してゐたが、その時彼の生涯は死によつて縮められた。

八八、中世キリスト教世界の分裂　一二四二年に於けるオグタイカンの死は西ヨーロッパのキリスト教世界をそれ以上の災厄から救つた。首府を北京に定めた蒙古帝國のヨーロッパに於ける境界は、大體黑海、ドニエストル河、及びヴィスチユラ河のまゝであつた。地球上の斯くも尨大な領域と斯く數千萬の人間とが、唯一人の支配者に服從したことは、未だ曾てなかつたのである。偉大なるクブライカン(西暦一二六〇—一二九四年)は、彼の異常なる時代の疑ひもなく最も有力の人であり、又疑ひもなく最も教養ある人の一人であつた。彼の宗教的偏見に捉へられなかつたことは著しく、ために彼はキリスト教徒とモハメッド教徒との兩者を招いで、彼の宮廷に來つて彼等の主義を彼の前に陳述せしめんとしたのである。ヴェニスの商人マルコ・ポーロが、支那まで彼の驚くべき陸上旅行を試み、極東の知識をヨーロッパに將來したのはこのカンの治世中であつた。要するに、クブライカンの帝國は、キリスト教世界と永い間孤立してゐた支那とを交通せしめたのであつて、その交通が劃時代的結果を生じたのである。その孤立の數千年間に支那は美術及び工藝に於て長足の進歩を遂げてゐた。支那は特に三つのものゝ秘密を發見し、それらに就ての知識が韃靼人によつてヨーロッパに傳へられた。それらのものゝ重要なことは殆んど云ひつくすことが出來ない程である。と云ふのは、それらは(一)火藥、(二)羅針盤、及び(三)印刷機及びこれを補ふ製紙法であつたからである。これらの三つのものは中世キリスト教世界を分裂せしめたる有力なる道具であつたのである。

けれども、第三階級に破壞的の力と知識とを與へたこれらの機械的發明とは別に、中世キリスト教世界は十四世紀に於て急激なる精神的並に政治的分裂を經過

した。（一）一三〇三年に於けるボニフェース八世の屈伏と、（二）一三〇九―一三七六年の間アヴィニョンに於ける法皇の監禁と、（三）一三七八―一四一七年の間つゞいた教會の不幸なる分裂とによつて、法皇の主權は覆された。一つの統一せるカトリック教世界の代りに、幾つもの民族國家が彼等の最後の形を取り、且つ境界に關する彼等の喧爭と、主權と勢力への彼等の統治者の要求とによつて、キリスト教世界を混亂せしめるやうになつた。生れんとする民族國家のこれら總ての爭ひの中で最も顯著なのは、イギリスとフランスとの間の百年戰爭（西暦一三三七―一四五三年）であつた。その結果、イギリスの國王はカレーを除く大陸の總ての領土から驅逐され、且つフランス王國が中世末期の列强中の首位を占めるやうになつた。

けれども、西ヨーロッパの新興の民族王國の中からではなく、イタリーの都市國家の中から文藝復興の光が放たれることゝなつたのである。

第二十三章　文藝復興

八九、中世後期のイタリー　この前イタリーに注意を向けた時には（八二）、ジュスティニアンが東ゴート王國を破壞した後に、ロンバード人がこの荒廢せしめられた國に入つて來て半ばこれを占領したる（西暦五六八年以來）次第を陳べた。けれども、ロンバード人はヴェニス、ローマ、及びネープルスのやうな都市を征服しなかつたし、又彼等の勢力は半島の極南――その趾と踵――には及ばなかつた。これら總ての非ロンバード的地方ではビザンチン皇帝の主權がまだ認められ、南部地方では十一世紀まで（西暦一〇三〇年以來）それが實際に行使されたのである。ノルマンの海賊が來て次第に全部を征服した。近くラテン・キリスト教に改宗してゐたノルマン人はこの地方をローマ教會に取戻して、法皇廳からの封土としてこれを領有することに同意した。しかし彼等はギリシア文化を破壞しなかつ

たので、その文化が引續き榮えたし、又彼等はギリシア語を根絶せしめなかつたので、その言葉が學術並に商業上の用語として殘つたのである。

かゝる間に中部及び北部イタリーのロンバード王國はフランク人に征服された。最初の獲得地――西暦七五五年に於けるペピンの寄進、及び西暦七七四年に於けるシャレーマンの寄進――は法皇に與へられ、イタリーに於ける法皇の政治的權力の基礎となつたのである。けれどもシャレーマンによる「ロンバード王」號の繼承と、それ以上に彼による西ローマ帝國の復活とは、法皇と皇帝との主權の要求を衝突せしめたのであつて、中世後期はロンバルディー、トスカニー及び南部の支配權を得んとする「二つの力」――法皇派と皇帝派――の激烈なる爭ひを以て滿されたのである。

皇帝フレデリック二世の死（西暦一二五〇年）と數年後に於ける彼の家系の絶滅（西暦一二六八年）とは、皇帝の支配を終熄せしめた。アヴィニョンに於ける法皇廳の「バビロンの監禁」は直ちに教會の權力を弱くした。市や州や公國が獨立を宣言し、彼等自らの政府を樹立し、光榮と繁榮との行路に門出するやうになつた。

中世後期のイタリーの都市國家中で首位を占めるのはフローレンスであつて、その事實上の自治の時代は西暦一二六六年以後であつた。この市は進歩せる共和政體を採用し、手廣い商業を發達せしめ、廣大なる金融業を樹立し、美術及び學藝の奬勵のためにその蓄積しつゝある富を用ひた。特に偉大なる金融業家メディチ家が優勢を占めた時（西暦一四三四年以來）フローレンスは文化と人道とに於て世界を指導したのである。

九〇、オットマン・トルコ人の襲來　フローレンスの文藝復興の最も著しい特色となつたものゝ一つは、ギリシア古典の研究が復活したことであつた。イタリーに於けるこのギリシア文化の復活が、總ての人に立ちまさつて何人に原因するかと云ふ問が發せらるゝならば、必ずしも氣まぐれならざる答は次のやうであらう、

曰くジンギスカンに！而して次に述べるところがその答の辯證となるであらう。

ジンギスカンがバルカシュ湖とアラル海との間の遊牧人種の上に彼の領土を擴張しつゝあつた時に（八七參照）、彼の政令の下に屈從することを肯んじない若干の人種――オットマン・トルコ人の先祖――があつた。それ故に彼等はジンギスカンを逃れてオクソス河を渡り、長途の漂泊と激烈なる戰鬪との後、西暦一二五〇年頃小アジアのマルモラ海沿岸に定住することをセルジューク人から許されたのである。西暦一三〇一年彼等は獨立を宣言して再び强い軍國的勢力となつた。小アジアに於て大いに領土を擴張したる後、西暦一三五八年に彼等はヨーロッパに渡つて衰餘のビザンチン帝國からガリポリを奪取した。三年後に彼等はアドリアノープルを占領し、これを首府とすることによつて更にヨーロッパを征服せんとする意圖を明かにした（西暦一三六一年）。この侵略的な且つ不吉な行動は、引續き三回に亘つて彼等に對するキリスト教徒の聯合の組織を促したが、マリッツァ河一三六四年、コッソヴオ一三八九年、及びニコポリス一三九六年の三ケ所の戰場に於て、彼等は敵を粉碎し、次でコンスタンチノープルを占領せんと待構へた。西暦一四〇〇年には彼等は實際にこの偉大なる都市の攻圍を始めたが、豫期せざる事情によつてこれを中止せねばならぬやうになつた。西暦一四二二年には二度目の攻圍を試みたが功を奏しなかつた。キリスト教徒として最初のローマ皇帝がアジアの敵から西洋文化を護るためにこの偉大なる都市に、西暦一四五三年までは避け難き運命が落ちて來なかつた。

ビザンチン帝國の長い死の苦悶（西暦一三五八―一四五三年）はイタリーに二つの別々の文化的影響を與へた。オットマン人が徐々として進擊し、昨一市を取り今一市を取ると云ふやうにして、コンスタンチノープルに迫つてゐた間に、多くのギリシア人たる學者及び商人は出來る限りの文學的財寶を持つて、彼等の言語が尙話されたる南イタリーの地方に逃げて來た。同時に惱めるビザンチン帝國と

惧れたるギリシア教會とは西部キリスト教世界の援助を求め新なる十字軍を要請した。特に西暦一四三八―一四三九年には皇帝と總教主とがイタリーを訪問し、終にフローレンスに於て法皇廳に恭順を表してギリシア教會とラテン教會との再合同の目的を果した。この再合同は長續きしなかつたし、それはコンスタンチノープルを救はなかつたけれどもそれは著しくイタリーに於けるギリシア文化の復活を刺戟したのである。トルコ人がこの偉大なる都市を占領するよりずつと以前に、その圖書館は、新に顯はれたる古代世界の財寶を護ることに熱心なる法皇や樞機員や諸侯や豪商の使者によつて掠奪されたのである。

九一、人文學の復活　古典復興の影響はフローレンスにては十四世紀末以前に於て力强く感じられた。ペトラルカ(西暦一三〇四―一三七四年)は當時のラテン文體を中世の不正格から矯正し、ローマ文學の傑作の研究を復活した。ボッカチオ(西暦一三一三―一三七五年)はギリシアの書庫を探り、南部イタリーの避難者から熱心にギリシア語を學び、永い間忘れられてゐたキリスト教以前の古代思想を普及せしめることを始めた。西暦一三九六年にはこれ亦南部イタリーのギリシア人なるクリソロラスがフローレンスに招かれ、そこでは總ての地位と職業との人々が熱心に彼の門人となつて、新しい學問の秘められたる寶を開くべき知識の鍵を獲やうとしたのである。

何故ギリシア語の研究が今よりも遙かに多くの熱心を刺戟したか、而して何故總ての種類と境遇との人々が――辭書や文法書や註釋書の助を藉りないで――プレトーやアリストートルやホーマーやヘシオッドやエスキラスやユーリピデスを原語で讀む力を得るために喜んで彼等の生命と彼等の財産とを消費したかと問ふならば、その答は遠くに求める必要はない。ギリシア人の人生觀は中世紀に行はれてゐた人生觀とは全く違つたものであつた、古典の復興は人間の再發見であつた。ギリシア・ローマ文化の衰頽期の特色であつた墮落に怖れをなし、ペルシア

宗教の二元主義の影響を受け、シリア及びエジプトの禁欲主義に心を惹かれたる中世の神學者は、世界は邪惡であつて人間性は全く墮落してゐると主張したのである。彼は理想の生活が克己と、禁慾と、斷食と懺悔と、人事からの隱遁とを要することを敎へた。ギリシア人の人生觀はこの總てと正反對であつた。それは人生の目的が自己實現であること、職分の正當なる遂行が心身兩者のあらゆる力と活動とを充分に發動させ且つ發達させることを必要とすることを、敎へるよりも寧ろ假定した。それは世界と人間を最高善と認め、自然法を行爲の最高の指導者と認めたのである。イタリーに於ける人文學の復活は異敎主義への明らさまな復歸であつた。

九二、美術及び科學の再生　文藝復興はギリシア・ローマの古代への單なる復歸だけに止まらなかつた、若しそれだけに止まつたならばそれは單に生命なき反動的な運動であつたであらう。敎會よりも古い世界の意外なる發見は、中世の敎育が訓練し且つ獨立の準備をさせた精神に新なる且つ創造的な活動を促すやうになつた。三學は學問の基礎を與へ、四學は弱いながらも科學の建築を附加へ、神學は形而上學の難問題に於ける練習を行ひ、法律學は精神の敏活な働を發達させ、スコラ哲學は智的體操の課程を授けたが、その回旋の中で眞と僞との相違は判別されなくなつた。要するに北方蠻人の後見時代は終り、ラテン優勢時代は終りに近づきつゝあつた。世人の精神は僧侶たる敎師の制御を振棄てゝ、自分の研究的な且つ嘆稱し勝ちな眼を以て世界を眺めるやうになつた。美術及び科學の範圍に於て人間は再び動き出した、それもギリシア人がキリスト紀元前に到達した地點からは甚だ多く動き出したのである。

その驚くべき建築を別として、中世の美術は粗野であつた。その彫刻は幼稚であつたし、その繪畫は滑稽であつた——遠近法も背景も明暗も解剖も自然に對する感情も運動もないものであつたから。美術の復興は十三世紀のフランシス派の

修道僧を以て始つたのであつて、彼等は人生觀に於て根本的に自然主義的であり且つ異教的であつた。殊にジオットー（西暦一二六六―一三三七年）がアッシシの教會の壁に描いた有名な壁畫は、中世の眼が地上の美と人間の現實とに開けたことを示した。美術上の自然復歸はフラ・アンジェリコ（西暦一三八七―一四五五年）、フラ・リッポ・リッピ（西暦一四〇六―一四六九年）、及びボッチチュリ（西暦一四四四―一五一〇年）の作品に於て力説されたが、レオナルド・ダ・ヴィンチ（西暦一四五二―一五一九年）、ミカエル・アンジェロ（西暦一四七五―一五六四年）及びラファエル（一四八三―一五二〇年）の傑作に於て、驚くべき技巧の完成と合せて、それは最も充分なる表現に達したのである。

十六世紀の科學の復興はギリシア文化末期のアレキサンドリアの偉大なる自然學者の著作の發見によつて特に印刷術の發達が彼等の著作の普及を可能ならしめた時に、著しく刺戟されたのである。コペルニクスを發憤さして太陽系の眞の構造を發見することが出來る程の研究をなさしめたのはトレミーの天文學の挑戰であつた。トスカネリをして彼の有名なる世界地圖（西暦一四七四年）を造ることを得しめ、且つコロンブスに彼の劃時代的な西方航海を暗示したものは古しへのエラトステネスの地理學の印刷であつた。

第二十四章　地理的發見の時代

九三、探險の遲延したる原因　西暦一四九二年にコロンブスが海圖に記されぬ太西洋を横斷して第一回の航海を企てた時には、地球の陸地の約三分の一だけがキリスト教世界の人々に知られてゐた。アメリカとオーストラリアとは記憶から消失せ、北極圈及び南極圈内の寒い大陸は探險されず、中央及び南アフリカすらも海岸だけしか知られず、それも從前六十年間に於けるポルトガル人の遠征の結果に外ならなかつた。

何うして累世の長きに亙つて斯くも宏大な陸地が地中海文化に屬する諸人種によつて氣付かれずにゐたかと云ふに、その理由は次のやうにあるであらう。第一、キリスト以前に於けるアレキサンドリアの地理學者の發見にも拘らず、地球の形狀に關する誤つた見解が引いゞき行はれてゐた。地球は普通は平い圓い皿のやうなものであつて、その中心は東部地中海の中又はその附近の邊にあると考へられた。このために太西洋は人の住み得る陸地の終極を取まいてゐる洋河の一部であつて、その彼岸には「女怪や九頭蛇や恐ろしい吐火獸」の怖るべき住家があるばかりと考へられた。第二に、古代及び中世の船舶は遠洋探險の航海に適しなかつた。船は大部分小さくて甲板がなく、艪で撓いだので、大量の食料供給物を運ぶ力なく、大洋の長期に亙る危險に面するには全く不適當であつた。第三に、航海の機械は不充分であつた。羅針盤も六分儀も經線儀もなかつたので、船員は陸地の見えない遠くに乘出すことを躊躇した。航海は主として沿岸航行であつた。船が外洋に乘出した時には、それは全く天體を道しるべとして賴つた。雲や暴風雨が天體を朦朧とすることがあつても、港に船がゝりする機會は少かつた。最後に、古代及び中世の人々の頭を惱すことは他に澤山あつた。彼等は大膽な思索に耽る餘裕を餘り有たなかつた。比較的僅かな資力を以て彼等は絶えず無數の敵に對して生存競爭をしてゐたのである。時たま平穩と安定との時が惠まれても、彼等は昔出來た世人周知の通商路によつて行はれる商業を以て自分等の慾望を滿足させ得ることを知つてゐた。

九四、十五世紀に於ける新事情　十五世紀までには事情が根本的に變つてゐた。ジンギスカン及びその後繼者の率ひた蒙古人の侵入は（八七參照）中世の通商路に深刻な變動を與へ――新しい通商路を開きはしたが、古い通商路を閉ぢた。クブライカンの宏大な領土は、なる程、その偉大なる統治者の死後（西曆一二五四年）に分裂して、宗家は單に支那の一王朝として繼續したが、この韃靼帝國よ

り分裂したる各部は統一時代の帝國よりも遙かに通商を禍ひした。殊にサマルカンドを首府としてトルキスタン地方を包含したる部分はタメルラン（卽ち跛者チムール、西暦一三三六―一四〇五年）の下に再び强力に且つ底知れず破壞的となつた。

加之、韃靼人の外に、トルコ人が耐へがたき厄介物となつた。彼等は次第に東方を貫通する總ての道路を所有し、一つ一つ總ての大きな通商上の中心地――コンスタンチノープル、トレビゾンド、アンチオク、アレキサンドリア――を占領して、商品に法外な稅を課するやうになつた。ペルシア、インド、マレーア及び支那との緊要なる通商のために新なる通路を發見することがキリスト敎世界に取つて焦眉の急務となつたのである。

十五世紀までには斯うする方法が手近にあるやうになつた。第一、アレキサンドリアの地理學者の著作（殊に西暦一四五二年に刊行されたエラトステネスの著作）の發見と印刷と廣汎な傳播とは、地球の眞の形狀を明示して西方航海によつてアジアに達する可能性を明瞭ならしめた。第二に、造船術が――主としてヴェニスやゼノアの偉大なる豪商の力によつて――大いに改善された。船舶は大きくなり、甲板が出來、武裝は嚴重となり、その中の若干は全部又は一部帆によつて進むやうになつた。第三に、羅針盤（韃靼人の使者によつてヨーロッパに傳へられた支那人の發見）は、イタリー人の技術を加へられて信用すべき航海機械となつた。第四、六分儀及び經線儀の發達によつて、觀測者の立つてゐる緯度と經度とを正確に決定することが容易になつた。最後に、野心ある國王や富める商人階級のゐる民族國家がヨーロッパに形成されたために、發見のために航海を準備するに要する資金が與へられるやうになつた。

九五、探險の開拓者　有效なる探險はポルトガル人によつて始められた。殊に、國王ジョン一世の子にしてイギリスのゴーントのジョンの孫なる航海者ヘンリ

ーは、名高い開拓者であつた。彼は主としてキリストの王國を西部アフリカの土人の間に擴げやうとする熱心な十字軍武士の熱情によつて彼の事業を始めたが、それを繼續してゐる中に、インドに至る新なる海路の發見が起つたのである。彼自身としては航海者と云ふよりも寧ろ探險の組織者であつたが、彼が準備して派遣した船隊は西暦一四四五年にはヴェルデ岬に達し、十五年後、この王子の死んだ年（西暦一四六〇年）には、ヴェルデ岬列島を發見した。その後ポルトガルの探險者は西暦一四八四年にはコンゴー河口に、而して西暦一四八六年には喜望岬に達した。しかし、西暦一四九八年までは永遠に記憶さるべきヴァスコ・ダ・ガマが喜望岬を廻航して、北方遙かにモンバサまで沿海を航行したる後、人の知らぬ太洋を横斷してインドの海岸（カリカット）に達しなかつた。二年後にはも一人のポルトガルの海員が、これ亦喜望岬を廻つて印度に行かうとしたが、航路を誤つて、驚いたことにはブラジルの海岸に達し、航海を繼ける前に、これを彼の國王のものなりと主張したのである（西暦一五〇〇年）。

しかし、これより先きに、スペインガ發見の太洋に入つて新世界に於ける自國の勢力範圍を主張するやうになつた。こゝに於てクスリトファー・コロンブスは自ら先覺の榮譽を主張したが、近來の研究は彼の名聲を失はしめて、他の人々に獨創の名譽を與へやうとしてゐる。しかしそれは兎もあれ、彼は確かに太西洋を横斷して四回の航海をなし、それによつて世界史の新時代を開き、長い地中海優勢時代を終結せしめたのである。彼は引力の中心を太西洋に移し、スペイン、フランス、オランダ、イギリスが富と勢力とを得る門戸を開放したのである。西暦一四九二年には（支那を志して）彼はバハマに、西暦一四九三年にはハイチに、西暦一四九八年にはトリニダッドに達して南アメリカの海岸を望み、終に、西暦一五〇二年に、彼はパナマ附近に於て大陸に達したのである。しかし、彼はその翌年に、彼の發見の重大なることを理解せず、知られたる世界に一つの新なる大陸を

附加したことを知らずに死んだ。この重大なる事實に最初に目覺めた人は、コロンブスと同時代の人なる、アメリゴ・ヴェスプッチであつた。開拓者コロンブスの名を取らず、彼の名を取つて、新大陸が「アメリカ」と命名されたのである。

九六、新世界　新に探險された太洋も新に發見された大陸も共に開拓者たる國民、卽ちポルトガル人とスペインとの獨占的財產なりと主張された。法皇の敎書がこの主張を承認し且つ確認し（曆西一四九三年）、二國間のトルデシラスの條約（西曆一四九四年）は彼等の範圖を劃定した。ブラジル以外の南アメリカを切取る一つ線（大體西經四十六度）より、東全部をポルトガルが、又西全部をスペインが要求したのである。

ポルトガル人は、インド貿易に沒頭してゐたので、あまり彼等のブラジルの領土を利用しなかつた。しかし、スペイン人に多くの勇氣と、最も無遠慮な殘忍とを以て、彼等の所有に歸した宏大なる地域を占領し且つ掠奪した。ヘルナンド・コルテスによるメキシコの征服（西曆一五一九―一五二一年）と、ピサロ兄弟によるペルーの征服（西曆一五三一―一五三二年）との物語は、役者が如何なる種類の姦惡をもやりかねない惡人であつたと云ふ點を除いては、ローマンスのおとぎ話のやうに思はれる。これらの征服が無智な、狂信的な、流血と黃金とを貪る人々によつてなされたことは嘆かはしい。何となればメキシコとペルーとは何れも古い不思議な文化の遺蹟であつて、その文化は西曆前數千年に地中海地方に榮えた所謂「日輪石」文化と多くの類似點を有つたものと思はれるからである。キリスト敎世界と大いに異つた思想と制度とを觀察すべき機會はこの時以外になかつたのである。その機會は永遠に失はれた、何となれば野蠻な侵入者は唯々掠奪し、殺戮し、且つ破壞することばかり考へたからである。

殆んど一世紀の間、新に發見された陸地と海岸とに於けるポルトガル人とスペイン人との獨占は甚しき攻擊を受けなかつた。しかるに、十六世紀の末になつて、

オランダ、フランス、及びイギリスの海員がこれを侵害するやうになつた。或るものは漁夫として殊にニューファウンドランドの附近に行き、他のものは探險者として凍つた北氷洋によつてインド及び支那に至り新なる通路を發見せんと企て、他のものは商人としてスペイン及びポルトガルの移住者と通商を開かんとし、最後に、他のものは移住民として熱心に海洋を渡つて新なる國土を發見せんとした。

オランダ及びイギリスの海員がスペインの大帆船を攻擊し且つ掠奪したる理由の一つ、オランダ及びイギリスの移民が太西洋を渡つて國土を求めた理由の一つは、ヨーロッパに於て十六世紀に宗教的革命が起つたことである。所謂宗教改革が始つたのである。

第二十五章　宗　教　改　革

九七、教會の不統一　我等は既に(八八)十四世紀に於て中世のキリスト教世界が崩解の明かな徵候を示したことを知つた。なる程、この世紀の初めに位に卽いた法皇ボニフェース八世は、彼の先驅者の誰によつてなされたよりも一層高く且つ一層尊大な要求を普遍的支配——政治的並に宗教的の——に對してなした。加之、彼が西曆一三〇〇年にローマに催した大赦祭に於ては、彼が權力の頂上に立つてゐるやうに思はれたばかりでなく、キリスト教世界の統一と連帶とは參列したる總ての國からの多數の敬虔な巡禮によつて驚くべき程に表示されるやうに見受けられた。しかし、外觀は僞瞞的であつた。この大赦祭のその時に於て、彼等の國民の各階級の支持を受けたイギリス及びフランスの國王は、着々として且つ何等の罰を受けずして、法皇の權威を無視しつゝあつた。キリスト教世界は、實際、新なる民族性の精神によつて分裂しつゝあつたのである。三年後にフランス王の使者が、アナニュイに於て傲然自負してゐたボニフェースを攻擊して彼を打倒

するに及んで、この事實は悲劇的に例證された。

これより起つた法皇廳の「バビロンの囚はれ」（西暦一三〇九―一三七六年）は教會の最高の統治者の普遍性と公平とに對する世人の信仰を大いに弱めた。アヴィニョンに行在せる法皇は皆フランス人であり、樞機員會は彼等の同國人を以て滿され、法皇廷の政策は著しくフランスびいきであつた。イギリスは、フランスとの百年戰爭に從つてゐたために、疎んぜられたので、その歳貢の納附を停止し（西暦一三三三年）且つ僧正補佐及びプレームニール〔法皇權を支持し國教會を否認するものを召喚する旨州執行官に發する令狀〕に關する反法皇的法律を制定する（西暦一三五一―五三年）ことによつて、自國の不滿を示した。ドイツは更に一層公然と反對した、即ち皇帝バワリアのリューウィスと法皇ジョン二十二世との間には公然たる確執が行はれ――中世のフランス對ドイツ戰爭――互に惡口の限りを盡し、且つ破壞的な政治理論を闘はした。イタリーは、法王廳から與へられた威信と利益とを忘れて、猛烈な謀叛を起し、ローマは少許らくの間リエンチの下に自ら共和國なりと宣言した（西暦一六四七―五四年）。

イタリー、ドイツ、及びイギリスは終に法王廳をローマに奪還することに成功した（西暦一三七六年）。殆んど即時の結果は教會の大分裂（西暦一三七八―一四一七年）であつた、對立せる法皇――一人はアヴィニョンに、一人はローマに――對立せる樞機員會、對立せる僧侶が、キリスト教世界の諸國民を自殺的な内亂に分割したのである。

九八、ドイツの宗教改革　十五世紀にはキリスト教世界の致命的分裂を醫し、教會の上下を改革し、且つ當時の動亂に乘じて榮えたる多くの異端者を抑壓せんとする必死の努力がなされた。コンスタンスの大宗教會議（西暦一四一五―一四一七年）は新法皇マルチン五世の下に形式上教會を再び結合することに成功したが、當時の急迫せる弊害の改革を起すことには全然失敗した、而してそれはボヘ

ミアの異端者ジョン・ハスを焚刑に處したけれども、異端問題そのものを解決せんがために何等の眞面目な努力をしなかつた。

ローマに歸つた法皇等は、速かにローマ及びイタリーの政治の渦中に投じた。彼等はイタリーの諸侯に成下り、慈悲に於ても道德に於ても彼等は周圍の文藝復興期の新異教主義者より餘り勝れてゐなかつた。彼等は法皇領を回復し且つ擴張せんがために戰つた、彼等は屢々彼等の實子なる甥のために公國や女後繼者を獲やうと努めた、彼等は同盟に加はつて戰爭を起し、時には自ら武裝して軍隊を指揮した、彼等は新時代の學者や藝術家を保護し、キリスト教に對する彼等の公然の攻擊と彼等の甚しい不道德とを默許した、彼等はローマを再建し且つ美化し、このために總ての國々の信者の獻金を使用した。

西曆一五〇六年に藝術の立派な保護者なる法王ジュリアス二世が、聖ピーターの偉大な莊嚴な教會堂の礎石を据へた——ブラマンテを建築家とし、ミカエル・アンジェロとラファエルとを裝飾家として。ジュリアス二世の死後、有名なフローレンスのメディチ家より出たレオ十世が工事を續行した。このために使つた莫大な出費はキリスト教世界から獻金を獲るために特別の努力を必要とした、而してその目的のために赦罪券——罪の罰からの免許狀——の販賣が特別の手段として採用された。

既に深い不滿を有つてゐたドイツに於ては、赦罪券の販賣が公然の謀叛を招いだ。西曆一五一七年にオーガスチン派の修道僧にしてウィッテンベルヒ大學の教授たるマルチン・ルーテルは、九十五の論題を提出して赦罪券の全學說を攻擊した。彼の攻擊の結果は彼自身と世界とを驚かした。ドイツ民族は彼を支持するために憤起した。法王廳は破門し(西曆一五二〇年)帝國は追放したが(西曆一五二一年)無效であつた。ドイツの大部分はルーテルに從つて新教となつた。ドイツの新教はラテン人の支配に對するチュートン人の謀叛であり、僧侶の權力に對する素人

の叛亂であり、不法なる誅求に對する勤勉なる造富者の不平であり、宗教裁判的抑壓に對する自由なる智力の興起であり、拘束的團體に對する個人の復活であり、就中最も醜惡な弊害に陷り易い慣例――赦罪券の販賣――に對する道德的な人民の反抗であつたのである。

九九、宗教改革の普及　ドイツの宗教改革は西暦一五五五年アウグスブルグの媾和によつて終結された。その結果ドイツは二つの相敵せる部分に分れた――大まかに云へば、新教の北部と舊教の南部とである。初めて教會は異端を破ることに決定的に失敗した、キリスト教世界の縫目なき外衣は永久に二つに裂かれたのである。

加之、この分裂はドイツだけに止まちなかつた。それは速かにスウィスに弘まつた――こゝでは多くの市と州とが、名義上は帝國の内にあつても、十四世紀に於て聯邦を組織して實際上の獨立に到達してゐたのである。夙に西暦一五一九年にツウィングリウスがチューリッヒに於て一つの宗教を說き始めたが、その基調は聖書の終局的權威と、聖書の中に啓示された純潔且つ素朴なる福音への復歸とであつた。一五三六年には尙一層急進的で恐るべきジョン・カルヴィン――フランスからの避難者――がジェネヴァに居を構へて、その市を小許らくの間北ヨーロッパ一體――イングランド、スコットランド、ネーデルランド、スカンヂナヴィア及び一時はフランスまでも――に優勢となつたところの信條と組織との本部とした。カルヴィン教は神の意思の至上權と、人間の運命の永久的決定と、不死の靈の豫定せられたる宿命を修正せんと誇稱する總ての懺悔や巡禮や除罪宣言や赦罪券の無效とを力說した。

フランスは僅かの間(西暦一五一九―一五二九年)ルーテル教に傾いてゐた。國王フランシス一世はドイツの分裂を助けさうに見えるものは何でも援助し、彼の敵なる皇帝チャールス五世に難儀をかけることの出來る人は誰でも歡迎すること

を好んだ。しかし、幾許もなく、ドイツの農民叛亂が彼を驚かしたので、一五二九年には法王の助けを要することが急であつたために、彼は餘儀なくルーテル教との關係を絶たねばならぬやうになつた。西暦一五三九年頃からカルヴィン教はフランスに於て勢を得るやうになつたが、しかし、それは宮廷に於てゞはなく、カルヴィンによつて彼の「インスチチューツ」の中に說かれ、且つジェネヴァに於て應用されたる共和主義が、侵害し來る王權との爭ひに於て自分等を助けることを知つたところの封建的貴族の間に於てゞあつた。

同樣に、スコットランドに於ては貴族等は彼等の獨立のための爭ひに役立てるためにカルヴィン教を採用し、イングランドに於てはカルヴィン教はスチュアート王朝に反對する淸教徒の信條となり、オランダに於てはそれはスペインの羈絆を脫しやうとするオランダ人の喊聲となつた。到る處に於て、カルヴィン教は叛逆者や共和主義者や弑逆者の宗教であつた。

一〇〇、反動改革　十六世紀の中頃までには、宗教改革は何等かの形を取つてヨーロッパからカトリック教を一掃するであらうと思はれた。大陸の北部は殆んど全部プロテスタント教であつたし、南部に於てすらも、オーストリア、バワリア、ランゲドック、スペイン、及びイタリーそれ自身が脅かされた。しかし、その時までに二つの重要な發展が起つて、それが深刻に形勢を變化した。一方に於て、プロテスタント教の固有の弱點が曝露するやうになつた。他の一方に於て、カトリック教が存亡の危急に迫られてそれ自身を改革し、防禦のために組織を固くするやうになつた。

プロテスタント教の本質はその個人主義であつた。それは、教權に對して思想の自由を、慣習に對して良心を、僧侶や聖典や聖徒や執成を中介として得らるゝ靈交に對して神との個人的靈交を主張した。この個人主義はその長所から來るところの短所を有つてゐた。その異論は容易に人をして反教の罪を犯さしめる。プ

ロテスタント教徒の數だけの形式のプロテスタント教が起る傾きがある。十六世紀に於て「キリスト教徒たる人間の自由」に關するルーテルの主張に伴つて多數の論爭せる滑稽なる宗派が現はれ、無限に多數なる狂暴な破壞的な教義が唱導され、厭ふべき德則廢棄論と惡魔主義的な墮落とが流行するやうになつた。キリスト教世界の常識と一般的良心とは衝動され且つ驚かされた。法皇廳の墮落に對する抗儀が狂暴と邪惡とを逞くするに至らんとは誰も考へなかつたところである。

斯の如く反動を有利ならしめた事情の下に、カトリック教はそれ自身を改革し且つその勢力を回復するやうになつた。新しい教團が組織され、信仰のために戰ふことを誓つたのであるが、その中最も有名なのはイグナチウス・ロヨラによつて創立されたヤソ會であつた(西暦一五四〇年)。新しいタイプの法皇が教會を支配すべく選擧された——彼等は純眞な慈悲心と、聖徒のやうな性格と、斷乎たる意志とを有する人々であつた。トレントの大宗教會議(西暦一五四五—一五六三年)がカトリック教の道德を廓清し且つ教義を純化するために召集された。宗教裁判所が、法皇の指揮の下に、異端を掃蕩するやうになつた。禁書目錄が信者に彼等の讀んではならない圖書を指示することを始めた(西暦一五四六年)。スペインのフィリップ二世、イングランドのメリー、及びフランスのヘンリー二世のやうな國王が、反動改革を遂行せんとする教會の勢力に援助を與へた。

その結果は驚くべきものがあつた。スペインは幾多の恐るべき大殺戮に於て異端を燒盡し、宗教改革と文藝復興とは共にイタリーに於て仰壓され、フランスに於ては聖バルトロメオの虐殺(西暦一五七二年)と幾度かの宗教戰爭がカルヴィン教徒(ユグノー)の組織を分裂せしめた。

唯チュートン諸國——北ドイツ、スカンヂナヴィア、オランダ系ネーデルランド、イングランド、南スコットランド——に於てのみ、反動改革が決定的に失敗したのである。

第五篇參考意

Barker, E. The Crusades.
Beard, C. The Reformation.
Bryce, I. The Holy Roman Empire.
Creighton, M. History of the Papacy, 1378-1527.
Emerton, E. Beginnings of Modern Europe.
Hudson, W. H. The Renaissance.
Jacob, I. Story of Geographical Discovery;
Pater, W. The Renaissance.
Ranke, L. History of the Popes.

第六篇　近代の世界

第二十六章　民族國家主義

一〇一、宗教改革の歸結　十六世紀の末には西ヨーロッパのキリスト教世界は二つの永久的陣營――カトリック教とプロテマタント教――に分れて了つて、その間の分界線は爾來今日に至るまで根本的には變化しない。大體を云へば、ローマ人の傳統の後繼者たるラテン語系の諸國民はカトリック教に留まり、北方人の傳統の後繼者たるチュートン語系の諸國民はプロテマタント教徒になつた。人種的性癖と政治的先入思想とが宗教問題の解決に與つて力があつたことは疑ひを容れない。例へば、イタリーの帝國的並に世界主義的關係はカトリック教からの分

離を不可能ならしめたし、又同じ勢力がオースタリーとバワリアとをして彼等の中世的忠順を固執せしめるやうになつた。スペインに於てはカトリック教は民族的統一及び國王の權力と結合した。十五世紀の末、フェルヂナンド及びイサベラの治世に至るまでは、この紛亂せる國は何等の中央政府を有たなかつたし、又その時になつてからも、半島の種々なる人種を有効に團結せしめたる唯一の結合は、モハメッド教徒及びユデア人に對抗する共通の信仰と共通の敵意との宗教的結帶であつた。このために新なる愛國主義の精神に感動せしめられたる忠義なスペイン人に取つては、プロテスタント教は單なる國家的不忠の新なる且つ特別に叛逆的な形式であると思はれたのである。フランスに於てはユグノーの勢力は衰殘の封建主義、貴族的特權、ドイツ人及びイギリス人と相通ずる不忠なる陰謀、人爲の內亂、秩序立てる政治と國民的團結との兩者に對する悲慘なる反抗の勢力と取返しつかぬ程に結合された。このために光榮と領土とを熱心に求める愛國的なフランス人に取つては、プロテスタント教は反動の分裂せしめ且つ痲痺せしめる形式なりと思はれたのである。

他の一方に於て、プロテスタント教はドイツ人に取つてはイタリー人の支配よりの分離を、オランダ人に取つてはスペインの羈絆よりの解放を、スコットランド人に取つてはフランスの後見からの逃避を、スウェーデン人に取つてはデンマークの支配よりの獨立を、イングランド人に取つては彼等の國が種類の如何を問はず總ての外國の權力から獨立せる「帝國」であることの宣言を意味したのである。

要之、十六世紀に於ては黨派的政治と宗教的革命とが密接に結合してゐたゝめに、フィッギス教父のやうに「宗教改革の最高の功業は近代の民族國家であつた」と云ふべきか、或ひはその言をひつくりかへして近代民族國家の最初の功業は宗教改革であつたと云ふべきか、何れとも判別し難い程である。

一〇二、宗教戰爭　西暦一五五九年―一六四八年の時代は西ヨーロッパでは宗教戰爭として知らるゝ幾多の猛激な爭ひによつて特色づけられた。それらは表面上、一方その勝利をえたる經歷の最初の四十年間に易々と占領したものを保持せんとする宗教改革と、他方その失へる領土を回復せんと決心したる反動改革との間の激烈な爭ひであるやうに見えた。しかし、それには實際は全然宗教戰爭ではなかつた――實際、斯かる言葉の矛盾を考へることが出來るとしても。根本的な爭點は中世キリスト教世界の分裂とその結果として獨裁的な獲得的な君主の下に民族國家が形成されたことゝによつて惹起された政治問題であつた。最も重要な三つの爭ひはネーデルランド、フランス、及びドイツに於けるものであつた。

ネーデルランドの十七州――十はベルギー人で七つはオランダ人――は、これに就て住民が相談を受けなかつたところの幾多の王朝的婚姻及び外交的協約の結果として、西暦一五五五年にスペイン王の手に歸した。スペイン王――殊にフィリップ二世――は速かに彼等の自由を破り、彼等の獨特の制度を廢し、彼等の新しいカルヴィン教を抑へやうとした。立憲的手段によつて解決を計つて失敗した彼等は、西暦一五六五年に積極的反抗の手段に訴へるやうになり、それが西暦一五七二年に公然の謀反となつた。恐るべき爭ひが起つて、その結果ベルギー人の諸州はスペインに歸し（西暦一五七九年）オランダ人は完全なる獨立に到達した（實際的には西暦一六〇九年、形式的には西暦一六四八年にやうやく承認された）。

かゝる間にフランスは三十年間（西暦一五六二―一五九八年）一方は特權と權力とのために闘ひ、ドイツのルーテル教徒、オランダのカルヴィン教徒、及びイギリスのエラスタス教徒と同盟するユグノー貴族と、他方法王廳、ヤソ會及びスペイン人によつて援助されるカトリック教徒の國王との間の殘虐な爭ひによつて絶えず紛亂してゐた。この爭ひは多くの複雜な關係を有つのであるが、西暦一五七

二年聖バルトロメオ祭の虐殺に於て恐怖の頂點に達し、有名な西暦一五九八年のナント勅命の妥協に終つた。ブルボン王政はヘンリー四世といふ人物によつて實際的の勝利を得たことになる。

オランダ又はフランスの爭ひより更に一層恐るべきはドイツの三十年戰爭（西暦一六一八―一六四八年）であつた。それは根本的にハプスブルグ家の獨裁政治と地方的自治との間の爭ひであつて、フランスの爭ひと異り、ドイツに於ける總ての有効なる中央政府の完全なる破壞に終つた。ウェストファリアの條約（西暦一六四八年）は皇帝の權力の檢屍狀であつた。

一〇三、スペインの優勢　前述の總ての大宗教戰爭に於て敗北したのはカトリック教の味方であつて、カトリック教の味方はスペインの味方であつた。加之、これらの宗教戰爭に、當然なすべきやうに、西暦一五八八年に於けるアルマダのイギリス攻擊を含めるならば、カトリック教の第一の選手としてのスペインの地位は更に一層明かである。オランダ人が謀反したのはスペインに反對してゞあつた、フランスのヘンリー四世が終に勝利を得たのはスペインに反對してゞあつた、三十年戰爭に於て破られたのはオースタリーのハプスブルグ家と併んでスペインのハプスブルグ家であつた。換言すれば、スペインは宗教改革及び反動改革の世紀を通じて優勢なヨーロッパの强國であつたのであつて、宗教戰爭の終りはスペイン優勢の沒落を示すのである。

故に、この記述を續ける前に、この偉大なしかし陰鬱な王國を考察するために少許らく休息することが必要である。この王國の勢力は文藝復興の薔薇色の黎明に續いた近代の暴風雨模樣の朝の間、靄のやうに西洋の世界にかゝつてゐたのである。人々を驚かしめる第一のことはこれである、卽ち中世のヨーロッパに於て微弱であり、十七世紀中葉以來再び微弱となつたスペインが、短い時代の間――西暦一四九二――一六四八年――西洋に於ける無敵の優勢の地位に上つたと云ふ

ことである。この異常事の説明は遠くにはない。スペインの偉大は本國にではなく屬國に基礎を置いたのである。何等かの方法により――主として王朝的婚姻によつて――スペインのハプスブルグ家はネーデルランド、フランシュ・コンテ、ミラン、ネープルス及びシシリー、ポルトガル並にその廣大な東洋の領土、及び就中大西洋彼岸の新世界を獲得した。スペインが軍隊を備へ、アルマダを造り、少許くの間世界を恐怖せしめることが出來るやうにしたのは、この國がこれらの屬國から引出したところの比類なき富であつたのである。

けれどもスペインの支配は、スペインを除いては、到るところに於て耐へがたきものであつた。傲慢、殘忍、無智、狂信は一般的な謀反を惹起した、而してスペインがその帝國に對する勢力を失ふや否や、この國は速かに且つ回復すべからざるやうに權力の高峰から沈下したのである。ネーデルランドの謀反（西暦一五七二年）、アルマダの敗北（西暦一五八八年）、フランスとのヴェルヴァンの條約（西暦一五九八年）、西暦一六〇九年のオランダ人との休戰、ポルトガルの謀反（西暦一六四〇年）、ウェストファリアの條約（西暦一六四八年）は充分にこの國の衰頽の階段を示すところの事件である。

一〇四、フランスの興起　斯くてスペインによつて失はれたる優劣を繼受した強國は新しいブルボン王朝の下に於けるフランスであつた。

その宗教戰爭時代の間はフランスはヨーロッパ政局に於ける微々たる要素であつた。實際、一時は、この國が分裂して、スペイン人、ドイツ人、ユグノー教徒及びイギリス人の間に分割されることも、あり得べからざることではないと思はれた。しかし復活の過程は――ヴァロア王朝は西暦一五八九年に於けるヘンリー三世の暗殺によつて絶やされたので――嘗てはユグノー教徒の指導者であつた、ブルボン家に屬する、ナヴァールのヘンリーがローマと和を講じ、ヘンリー四世となつて、全フランス國民を再び統一して總ての外國の勢力に對抗した時に始つ

た(西暦一五九三年)。

ヘンリー四世は、彼の治世の殘れる十七年の間(西暦一五九三―一六一〇年)、彼の偉大なる大臣たるシュルリー公の援助を得て、ヨーロッパに於けるフランスの優勢の基礎を堅くしたのであるが、その優勢は約二世紀の間繼續し、西暦一六八四年頃ルイ十四世の治世の時にその最高點に達した。ヘンリー四世は寛容なるナント勅命(西暦一五九八年)によつて國民の宗教的分裂を癒し、不逞なる封建的貴族を嚴重に抑壓し、農業を奬勵し、商工業を助長し、財政を改革し、而して最後にはスペイン及びオースタリーのハプスブルグ王朝を顚覆し、フランスのために昔の自然的なライン河、アルプス山脈、及びピレネー山脈の國境を回復せんとする努力に於て彼に追從すべく國民に訴へることによつて彼等の精神を喚起した。

西暦一六一〇年に於ける彼の暗殺は彼の「遠大なる計畫」の完成を防止した。しかし、彼の政策は後繼者たるルイ十三世(西暦一六一〇―四三年)の下に、偉大なる大臣なる樞機員リシュリューによつて一段と老巧なる能力と成功とを以て追求されたのであるが、リシュリューの偏狹なる國家的目的は世界主義的なカトリック教會の樞機員としての彼の地位を非常に變則なものとした。リシュリューは第一にはユグノー教徒から總ての排他的な政治的特權を奪ふことによつてフランス國民の統一を完成し、第二には貴族を全然の隷從に還元することによつて王室の充分なる主權を樹立し、第三には兩ハプスブルグ家と法皇廳とを犧牲としてフランスを國外に膨脹せしめることとを以て、その任務なりとした。彼が三十年戰爭に參加してプロテスタント教徒に味方したゝめに、フランスはウェストファリアの講和(西暦一六四八年)の條件を決定することが出來たのである。

しかし、一六四八年にはリシュリューその人は死んでから六年立つてゐた。ウェストファリアの講和(それがフランスに、就中、メッツ、ツール及びヴェルダンの偉大なる國境要塞を與へたのである)を商議し、又十一年後にスペインとピレネー

條約を締結して、ルーシロン、セルダーニュ及びアルトワをフランスの領土に加へることは(西暦一六五九年)、彼の有爲の門弟にして後繼者たる樞機員マザランの双肩にかゝつたのである。

第二十七章　均　勢

一〇五、ルイ十四世の時代　樞機員マザランが西暦一六六一年に死んで、その時以來フランス政策の支配權は若き國王ルイ十四世自身によつて取られた。彼は一六三八年に生れ、一六四三年に王位を繼ぎ、一七一五年まで國を始めることゝなつた。彼の治世の七十二年間、しかし特に一六六一—一七一一年の半世紀の間に、フランスはヨーロッパに於ける政治的並に軍事的優勢のみならず、爭ふものなき智的並に美的卓越の地位に上つた。それはモリエール及びラシーヌ、ボッスエー及びフェネロン、パスカル及び翰林院の時代であつた。

一六六一年から一六七二年までルイは、コルベールの賢明な輔佐の下に、彼の政府の注意を財政の改革、商工業の助成、及び有力なる海軍の發達に獻げた。しかし、この若い王自身の性向は侵略、膨脹、及び戰爭に向つてゐた。而してこれらの性向はルーヴォワを首とする多數の阿諛者と邪惡なる顧問官とによつて長助された。彼等の勢力の下にフランス人は幾多の侵略を始めたが、その目的とするところはベルギー(スペイン領ネーデルランド)の征服、オランダ共和國の破壞、ライン河に至るまでのドイツの併合、ハプスブルグ家の沒落、及びヨーロッパに對する完全なる支配權の達成であつた。

オランダ人、ベルギー人、ドイツ人、及びスペイン人は、ルイ十四世の野心と無法とによつて等しく危險に曝されたゝめに、彼に對抗する目的を以て幾多の大規模なる同盟を造るやうになつた。その中の大概の場合に於て中心となつた人物はオレンジ公ウイリアムであつて、彼は西暦一六七二年に有力なるフランスのオ

ランダ侵入軍に對する英雄的な成功せる抵抗によつて勢力と名聲とを得た。一六八九年にはウィリアムがゼームス二世に次でイギリスの王位に卽くやう迎へられたので、彼の勢力は著しく增加した。アウグスブルグ同盟戰爭（一六八九—一六九八年）により、又スペイン繼承役（一七〇二—一七一三年）に於て、ルイ十四世の計畫は頓挫してフランス覇權の危險は除去された。均勢の原則が規定され且つ應用された。

均勢の原則に就てはオレンジのウィリアムが指導的な主唱者でもあり手本でもあつたが、それは要するに斯う云ふことである。卽ち、若し何れか一國が世界的支配を望むならば、自分の獨立を脅かされたる他の諸國が彼等自身を滅亡から救ひ、且つ國家間の正常の平等を回復するために團結するのである。

一〇六、イギリスの革命　結局、オレンジのウィリアムをしてルイ十四世の侵略を阻止してヨーロッパの均勢を回復することを得しめたる力は、イギリスの力——殊にその制海權——であつた。

フランス優勢時代に於て、イギリスは一つの憲法上の危機を通過しつゝあつたが、その結果として、一方に於てはその政治の完全なる變革となり、他の一方に於ては大陸に於ける勢力と、海洋の支配權と、植民地の擴張と、商業上の獨占とのためのフランスとこの國との間の恐るべき爭ひ——西暦一六八九—一八一五年の「第二百年戰爭」——の促進となつた。

イギリス王チャールス一世はフランス王ルイ十三世の義兄弟であつて、民衆的な三部會とユグノー教徒の地方分權との廢墟の上に、リシュリューによつてフランスに樹立された强き且つ有功な獨裁政治の非常なる嘆美者であつた。彼自身はイギリスで抑制的な議會と制御すべからざる淸教徒の團體とによつて對抗されてゐたので、これらの兩者を彼が神聖なる權利によつて所持し、且つ彼の祖先より傳承したる、王權の行使に對する惡魔的な障碍であると彼は考へた。故に彼はリシュ

リュー風の大臣――ストラッフォード伯トーマス・ウェントウォース、カンターベリー大僧正ウィリアム・ロード――の輔佐の下に、爭ひを起したのであるが、その結果として最初には彼の大臣等の而して最後には(西暦一六四九年)彼自身の首を取られた。それは十七世紀の世界史に於ける顯著なる事件であつた。それは國王獨裁政治の衰頽の發端と、民主主義の興起の開始とを表示した。

チャールス一世の死刑執行に續いて、イギリスを共和國に變へやうとする早計の且つ不成功に終れる企てがなされた。西暦一六六〇年に、行政的混沌から脱出する最善の方法として、チャールス一世の息子等が順次に國を治めるやうに呼びもどされた。しかし、彼等は彼等の父に與へられたる教訓を充分に利用しなかつたので、西暦一六八八年には、再びスチュアート家を王位から遂ふことが必要となつた。これはゼームス二世の放逐になつて完成されたが、彼はフランスに隱退して、彼の生涯の殘れる十三年をルイ十四世の年金受領者として送つた。

そこで、前述の如く、オレンジのウィリアムが王となつた。しかし、彼は新式の王であつた。彼の權力は世襲的な神聖なる權利ではなくて、彼の人民から得られ、特定の條件に從ひ、契約に基き、議會の法律によつて限定された。彼の即位はイギリスとフランスとの長い爭ひを急迫せしめた。けれども、これを償ふものとして、それはこの世紀の大部分の間イギリス人とオランダ人との間に行はれた激しい爭ひを終結せしめた。

一〇七、オランダの制海權　十七世紀頭初に於けるオランダ人の獨立成就に續いて、顯著なる繁榮と勢力との時代がやつて來た。オランダ人は彼等のスペインに對する勝利を大部分彼等の强い海軍の發達に負うたのであるが、その海軍は第一にはスペインがネーデルランドに軍隊を輸送するのを妨碍し、第二には戰爭を繼續するために必要なる富をもたらしたる外國貿易を樹立することをネーデルランド人に可能ならしめ、第三には大なるオランダ植民帝國――それは北アメリカ、

南アメリカ、インド及び香料諸島、オーストラリア、ニュー・ギネア及びニュー・ジーランドに於ける諸植民地を含んだ――を樹立すべき道を開いた。實際、少許らくの間（大體西暦一六〇九―一六七二年）、オランダ人は進歩的な文化の開拓者であつた。商業及び金融に於て彼等は明かなる指導權を有つてゐた、工業及び農業に於ては彼等は著しき進歩をなした、宗教及び哲學に於ては前者に於てはアルミニウス後者に於てはスピノーザの名が證明するやうに彼等は卓越してゐた、法律に於てはグロチウスの天才によつて、文學に於てはミルトンに影響を與へたるフォンデルの才能によつて彼等の名聲は高められ、美術に於ては彼等はルーベンス及びレンブラントの傑作によつて榮譽を與へられた。

しかし、不幸にして、彼等の膨脹線はイギリス人との激しい爭ひの渦中に彼等を投じた。二つの國民は多くの共通點を有つてゐた。彼等は人種に於て近似してゐた、彼等は宗教上密接な因緣を有つてゐた、彼等の政治思想は類似してゐた、彼等はスペインの束縛を破るために互に助け合つた。實際、彼等は餘りに類似してゐたゝめに平和裡に共存することが不可能であつたのである。彼等二國共破られたるスペイン人の遺產を獲得しやうとしてゐた、二國共植民帝國を發達せしめんと決意してゐた、二國共彼等の商業的企業を行ふに當つて活動的且つ侵略的であつた、二國共海洋の支配權を獲得せんと決心してゐた。

こゝから三つの恐るべきイギリス對オランダの治戰が起つた、第一は一六五二―五四年共和國の下に、第二及び第三は一六六五―六七年及び一六七二―七四年チャールス二世の下に。これらの爭ひに於てイギリスの優越せる資力は終局に於て勝敗を決した。オランダの制海權は粉碎され、オランダの商業は減殺され、オランダの植民帝國は大部分併合された。イギリス對オランダの抗爭の再始は、前述の如く、オレンジのウィリアムの下に於ける二國民の王室合同によつて幸ひにも避けられた。

一〇八、スペインの王位繼承　ウィリアムが死んだ時には均勢維持のための新なる且つ恐ろしき戰爭が正に始まりつゝあつたが、この戰爭を行ふためにイギリス人とオランダ人とが更に十二年間固い同盟を結んだのである。

西暦一七〇〇年にスペインのハプスブルグ家の墮落せる男系が死に絕えたので、スペイン王女を娶つてゐた(西暦一六五九年ピレネー條約の下に)ルイ十四世は、この廣大なる王國をフランス王子のものとして要求した。スペイン、東西インド、ベルギー系のネーデルランド、ミラン、ネープルス、シシリー、及び他の豐富にして極めて重要なる地方が、既に膨脹せるブルボン家の權力に加へらるゝのを座視することはヨーロッパに取つて不可能であつた。そこでオースタリーのハプスブルグ家、イギリス人、オランダ人は、プロシア人、ポルトガル人、サヴォイ人、及び他の諸小國と共に、相合して大同盟を作り以てフランスの危險なる侵略を防止せんとした。この時ルイ十四世の過大なる勢力は有效に破られ、西暦一七〇六年までにはブルボン家は如何なる代價を以つても膝を屈して平和を乞ふやうになつた。イギリス・オランダ艦隊は海上を支配してフランス・スペイン領土を意のまゝに拘束した、又マールボロー(一七〇四年のブレンハイム及び一七〇六年のラミリー)及びユーゼーヌ(一七〇六年のチュリン)の瞠目すべき且つ壓倒的なる勝利によつて、同盟軍はジブラルタル(一七〇四年)、バルセロナ(一七〇五年)、及びマドリッド(一七〇六年)を占領し、ブルボン家の勢力を粉碎し、その威信を破壞し、且つその士氣を荒廢せしめた。

この戰爭は西暦一七〇六年に終結したであらうし又當然終結すべきものであつた、蓋しこの年には決定的な成功がなされて、ルイ十四世が充分に挫かれたからである。けれとも同盟軍は執念深かつたので、彼等の昔からの敵を全滅するまで追求せんと決心してゐた。そこで彼等は敵の降伏の申出を拒んで、西暦一七一三年まで戰爭を續けた。既に獲得したるものゝ一部を失ひ、七年前に求め得たであ

らうよりも餘程少しをユートレヒト及びラースタットに於て受くべく餘儀なくせらるゝことによつて、彼等は適當に罰せられた。

ユートレヒト及びラースタットの條約(西暦一七一三―一四年)は、(一)ルイ十四世の孫なるアンジューのフィリップにスペイン王國を與へ、(二)オースタリーのハプスブルゲ家、卽ち皇帝チャールス四世にはベルギー系ネーデルランド、ミラン、ネープルス、及びサルヂニアを與へてこれを慰め、(三)オランダ人にはナムール、ツゥールネー、及びイープルを含むところの一連の國境要塞を與へ、(四)シシリーを、王號と共に、サヴォイ公の手に移し、(五)プロシアを王國として承認し、且つ少しの領土を加へ、(六)グレート・ブリテン――イングランドとスコットランドとは一七〇七年に合同された――にはその大いなる働きに報いるためジブラルタル、ミノルカ、ニューファウンドランド、ノヴァ・スコティア、及びハドソン灣地方をこれに割讓し、且つこれにスペイン植民地に於ける若干の商業上の特權を與へることゝした。

第二十八章　ヨーロッパの膨張

一〇九、ユートレヒト講和の歸結　スペイン王位繼承役に參加した二つの海軍國――聯邦ネーデルランドとグレート・ブリテン――の中で、前者はその勝利乃至その獲得物によつて殆んど利益をえなかつた。その奮鬪によつて全く疲弊し、人と金とを無くして、この國は靜かに世界政局の背景の中に沈淪し、その商業とその植民帝國との大部分が他國の手に歸するのを坐視せねばならなかつた。

グレート・ブリテンに就ては遙かに事情が違つてゐた。なる程、この國はこの爭ひを止めるに當つて、三四、〇〇〇、〇〇〇ポンドの莫大なる（當時はさう考へられた）負債を負つてゐたけれども、完全なる制海權と、その領土への廣大なる且つ貴重なる追加と、スペイン植民地及び南洋との重要なる貿易を發達すること

をこの國に可能ならしめたやうな有利なる商業上の權益とを得たのである。ユートレヒト條約に續いた平和の二十五年間(西暦一七一四—三九年)、ワルポール及びホウィッグ黨の安易なる施政の下に、この國は富み且つ繁榮するやうになつて、佚樂的且つ粗大となり、腐敗し且つ非精神的になつた嫌ひはあるにしても。地球の一方に於ては、東インド商會がマドラス、ボンベー及びカルカッタに於けるその大工場から莫大なる富をその社員と重役とのために集めた。地球の他の一方に於ては、ハドソン灣商會が北アメリカの狩獵民との貴重なる關係を樹立した。一層本國に近いところでは、モスコヴィ商會及び東國商會が白海及びバルト海との商業を開發し、この間に東方商會及びギネア商會は地中海及び南太西洋の暖い海を訪ねた。

南海商會はユートレヒト條約の權益を利用し、この間、この商會の活動範圍の北では、太西洋沿岸のイギリス植民地が人口と繁榮とに於て生長した。

プリテンの商業及び植民帝國の生長は二つのブルボン王朝の國から嫉妬と敵意とを以て見られた、殊に、フランスはインドに於ける商會の勢力の擴大を憤り、一方スペインは一七一三年にプリテンに與へたる權益を益々後悔し、且つこれを取消さんと欲した。ブルボン王朝の增大する敵意の結果として、一七三三年プリテンに對抗する「親族盟約」がフランス及びスペインの君主間に締結されることゝなつた。これより生じたるイギリス對ブルボン關係の急迫は結局一七三九年には戰爭となつたが、この戰爭は次第に制海權及び帝國のためのプリテン及びフランス間の決鬪となつたのである。

一一〇、イギリス・フランスの決鬪　十八世紀の大戰爭は歷史上新なる種類のものであつた。それらは範圍に於ては世界的であつて、二つの重要なる事實を雄辯に物語つた。第一、それらは人類の速かなる再合同を宣言したのであつて、アジア、アフリカ、アメリカ、及びオーストララシアは悉く單一の世界政局の蛛網

の中に引込まれた。第二に、それらは人類の事件に於けるヨーロッパ諸人種の爭ふものなき優勢を表示したものであつて、それは精神上、道德上、並に物質上の優勢であつた――精神上の優勢は卓越せる好奇心と、企業心と、發明の才と合理性とに因り、道德上の優勢は卓越せる勇氣と、確信と、品性とに因り、物質上の優勢は卓越せる富力と、準備と、兵器と、組織とに因つたのである。

唯一の重大問題は、ヨーロッパ諸人種の何れが再合同せる人類の指導者兼案內人となるかと云ふことであつた(1)。十六世紀の五つの植民的國民の中で三つ――卽ちポルトガル、スペイン及びオランダは決定的に戰爭から落伍して了つた。フランスとブリテンだけが殘された。それらの間の宿命的な爭ひが西曆一七四四年、所謂オースタリー王位繼承役の間に始つた。それは海上に於て、インドに於て、アメリカに於て、並に東インド諸島に於て行はれた。エース・ラ・シャペルの媾和(西曆一七四八年)はこの爭ひを未解決のまゝに殘した。實際、何れの側の政治家にも、この勝負の本質や重要さを理解するものは殆んどなかつた。

(1) 本文に云つたことは非ヨーロッパ的文化及び未開の諸人種がヨーロッパ人に比して卓れてゐなかつたところの他の、而して恐らくは一層重要なる諸點がなかつたと云ふことを少しも意味しない。それは單に十八世紀に於けるヨーロッパ人の優勢の明白なる事實を說明せんとするだけである。

しかし、それを理解した二人の政治家があつた、卽ちイギリスの老ウィリアム・ピットとフランスのショワスール公であつた。二人の中で、ピットは出世が早かつたのみならず政府及び人民の兩者から遙かに强き且つ一貫せる支持を受けた。そこでヨーロッパの七年戰爭(西曆一七五六―一七六三年)と時を同じくせる激戰に於て、ブリテンが決定的な勝利を得て、フランスは海軍國としても植民國としても不具となつたのである。この戰爭を終結せしめたるパリ媾和(西曆一七六三年)は(一)フランスの勢力を北アメリカから一掃してカナダをイギリスの領有に歸せしめ、(二)インドに於けるフランスの勢力を破つて、東インド商會にカルナティッ

ク及びベンガルに於ける政治的優勢の地位を與へた。キベロン灣に於けるホーク及びラゴス沖に於けるボスカウェンの偉大なる海軍の勝利（何れも一七五九年十一月二十日のことであつた）は、ブリテンに爭ふものなき制海權を與へた。この國の威信乃至勢力が斯んなに高くなつたことは未曾有である。この國の領土が斯んなに廣く擴張されたことも未曾有である。

一一一、アメリカ合衆國の建設　フランスの勢力が北アメリカから西暦一七六三年に全然排除されたために、イギリスの植民地は多年の間彼等を脅してゐた危險から救はれた。これらの植民地は十三を數へたが、十七世紀中に建設された十二にジョージアが西暦一七三二年に加へられたのである。それらは北緯三十度から五十度の間に、一千マイル以上太西洋沿岸に擴がつてゐた。カナダとルイジアナとの二つの遠く離れたフランスの植民地は河岸にあつて海岸にはなかつた、即ち前者は聖ローレンス河を溯つて大湖水に擴り、後者はミシシッピー河を溯つて大陸の中心に擴つてゐた。西暦一七四四—六〇年間アレゼニー山脈以西に行はれたる激しい衝突の主因となつたものは、オハイオ河の流域を進んで——斯くしてイギリスの植民地をその奥地から引離して——これら二つの植民地を結付けやうとするフランス人の努力であつた。老ピットの先見と、決意と、天才との總ての勝利中最大のものは、クウェベックの奪取（一七五九年）及びモントリールの占領（一七六〇年）となつて現はれた。西暦一七六三年に媾和がなされた時には、ブリテンは前述の如くにカナダを取得した。ルイジアナはスペインに移讓されたのである。

イギリスの植民地は最早母國の保護を要しなくなつた。從つてそれらは行政上の「舊植民主義」がそれらの發達に課したる制限に就ての鬱憤を以前表明しやうと考へ又は表明したよりも一層强く表明することが出來るやうになつた。イギリス政府はこれを、最近なされたる偉大なる且つ最も經費を要したる奉仕に對する

植民地人民の極端なる忘恩と考へて激怒してゐたので、アメリカ人の苦情を苛酷な非同情的な氣持を以つて聞いた。課税に關する特殊の異見は間もなく論爭を開かしめ、西暦一七七五年には實際に戰爭が起つた。

植民地人民は、能力と決心とはあつたにしても、若しもフランスとスペインとが彼等を救援しなかつたならば、確かに粉碎されたであらう。これらのブルボンの政府に取つては、最近の勝利を占めたる敵に對する復讐の好機逸すべからずと考へられた。それらは人と金とを叛民に送り、ブリテンの海上交通を斷つことに成功し、アメリカ人をして獨立を獲得することを可能ならしめた（西暦一七八三年）。

十三州の謀叛したる植民地は、長い論爭の後、聯邦共和國を組織した（西暦一七八七年）。この新しい國家の卽時の繁榮、その人口、富、及び領土に於ける急速の增加は、自由のためにストライキしたる植民地人民の行爲に對する最上の辯明となつた。

一一二、フランス革命への接近　フランス政府は謀反したアメリカの植民地人民を援けてイギリス帝國を分裂せしめることに於て享樂したる復讐の愉快に對して重い罰金を拂つた。この巨費を要する贅澤に耽る前に於てすらも、それは破產に瀕してゐた。ルイ十四世の國力をつくした戰爭は水久にフランスの財政を破壞し、廢頽的な厭ふべきルイ十五世の飽くなき贅澤はその回復を殆んど望なきものとした。ルイ十六世が西暦一七七四年に王位に上つた時には、彼に取つての唯一の解決法は嚴重なる經濟と税制の徹底的改造とにあつた。この新なる經濟は華美な享樂を好む若き女王マリー・アントワネットの趣味に適しなかつた、加之それは一度アメリカ人がフランスの國庫に喰入つてからは不可能であつた。法外の起債によつて資金を集めねばならなかつた、而して更に一層法外なる起債によつて前の起債に對する利子を拂はねばならなかつた、終に西暦一七八九年に避くべから

ざる破滅が來たのである。

も一つの方面に於ても亦、アメリカの戰爭はフランス革命への道をならした。有名なるラファイエットのやうな多くのフランス人は、義勇兵として太西洋を渡つて謀反したる植民地人民を助けに行つた。彼等は確信せる共和主義者となつて歸つて來たが、第一次的にはジョージ三世の政府に對抗したものであつても、その一般的原理に於ては君主政治一般に對抗する力のあつた文學――トーマス・ペーンの「常識」のやうな――を持つて歸つた。

フランス人の精神の土壤は――殊に有識中流階級の夫れは――共和主義の種子を受けるべく好く準備されてゐた。モンテスキューの著作は王權神聖論を破つて政治的諸制度の相對性を敎へたのであつた。ヴォルテールの立派な風刺物語は百科辭典學者等の巨大なる學問と相俟つて、カトリック敎會並にキリスト敎信條の權威を小くしたのであつた。ルーソーの熱情的な言論は人間の平等と人民主權に對する廣汎なる信仰を敎込み、貴族の特權と君主の要求とを等しく憎むべく且つ滑稽なものとしたのであつた。

それ故、西曆一七八九年にルイ十六世が、全くこれ以上の金を求めえないがためにのみ、彼の王國の三部會――それは西曆一六一四年以來召集されたことがなかつた――を召集すべく餘儀なくされた時に、五月五日ヴェルサイユに集合した第三階級の代表者等は、財政改革以上の或るものが必要であつて、それが成就されねばならぬと申合はせたのである。

第二十九章　民主主義と民族主義

一一三、新ヨーロッパ　フランス革命の勃發したるヨーロッパは、十八世紀の間に、若干の重要なる變化を經過してゐた。この時代の初めに主要であつたところの列强の中で四つは明かに衰頽してゐた。フランス自身ルイ十四世の下に世界の

覇權を爭つた國の影に過ぎなかつた。スペインは、新なるブルボンの君主の下に少許らくの間復活した後で、終に無力な取るに足らぬ國となつた。スウェーデンは、その彗星のやうな王チャールス十二世（西暦一六九七—一七一八年）の下に偉大なるバルト帝國を建設するかと思はれたが、再びその普通の孤立の地位にもどつた。而してオランダ共和國は、その海上及び植民地の優勢を失つて、政局から隱退して常の如く商賣を行ふことゝなつた。

しかし、これらの變化を補ふために、四つの他の強國がそれらの勢力と影響とを增加した。グレート・ブリテンは、アメリカ人の謀反の打擊にも拘らず、その制海權とその富とのおかげによつて、アン女王時代よりも比較出來ぬ程強くなつた。オースタリーは偉大なるマリア・テレサ（西暦一七四〇—八〇年）の善政の下に大いにその大陸に於ける地位を高めた。プロシアはフレデリック大王（西暦一七四〇—一七八六年）の驚くべく有能なしかし全く無法な政治によつて第一流の軍國的國家の地位に上つた。而して最後にロシアは、十八世紀の初めにはまだヨーロッパ的の國よりもアジア的の國であつたのであるが、バルト海に向つて前進して西ヨーロッパの國際政局に伍することゝなつた。

プロシアの興起はオースタリーとフランスとには極端に喜ばれなかつたので、從つてこれらの國は他の列强と結合してプロシア打倒の猛運動を起した。この爭ひは劇的な七年戰爭（西暦一七五六—六三年）に於て勝負が定つた。この爭ひに當つてプロシアは——主としてブリテン及びハノーヴァーの援助によつて——大勝を得た。その軍隊は、フリデリックによつて組織され且つ指揮されたのであつて、ヨーロッパ最上のものと認められた。

ヨーロッパの國際政局へのロシアの進出は均勢を深刻に攪亂したる要因であつた。東洋極西の君主國から西洋極東の君主國へのロシアの態度變化は、ピーター大帝（西暦一六八九—一七二五年）によつて行はれた。スウェーデンのバルト海支

配權に抗爭して、西暦一七〇三年にペトログラードを當時尙スウェーデンの領分であつたところに建設したのは彼であつた。十八世紀の間にロシアは西ヨーロッパの文物を學ぶのに忙しかつた――主としてドイツ人から。西暦一七七二年にこの國はプロシア及び、オースタリーと共にポーランドの分割（一七九三年及び一七九五年に完成された）に參加することによつて、その西ヨーロッパ化の殆んど完全なことを示した。

一一四、フランス革命　十八世紀は世界主義的な時代であつて、總ての流行社會の人々は自らフランス人なりと考へ、總ての競技愛好家は自らイギリス人なりと考へ、總ての共和國主義者は自らアメリカ人なりと考へ、總ての哲學者は自らドイツ人なりと考へた。しかし、ポーランドの分割と滅亡とは熱烈なる民族主義の感情を刺戟し且つ燃上らせたが、この感情は十九世紀に於て世界主義を克服して、人願社會の支配的原理となるのである。

更に、十八世紀は貴族的な時代であつて、貴族、鄕紳、官吏、僧侶、及びその他の特權階級は民衆がそれから除外されたところの權力と、多數者の隷從に依存したる文化と亭樂したのである。フランス革命は特權の終結と民主主義への接近とを表示した。

しかし、フランスの三部會が一七八九年に召集された時は何等か異常なことが起るらしいと考へたものは一人もなかつた。豫期され最大のものは、宮廷の支出が少くされ、上流階級の納稅が多くされるだらうと云ふことであつた。第三階級が先例を破つて自らこれに參加を希望する自餘のものと共に國民議會と名乘つた時すらも、イギリス式憲法に向つての溫和な中流階級的運動以上の何ものかを想像した人はなかつた。けれども、パリの暴徒によるバスチーユの襲擊に續いて、數ヶ月後には暴民がヴェルサイユに進擊することゝなり、火山の火が社會の深淵の中に燃えてゐることゝ、これを自分らの目的に役立てやうとする惡魔的な力が

働いてゐることゝが、明かにされたのである。

封建制度の突然の廢止によつて國中に起されたる經濟的混沌、貴族及び高僧の外國逃亡、彼等に加らんとする王室の企圖（一七九一年六月）、フランスに侵入して革命を暴壓せんとするオースタリー及びプロシアの準備――これら及び諸他の原因は下層階級の狂暴を逞しくせしめ、脅嚇政治の恐怖を以てフランスを壓倒した（西暦一七九三―九四年）。

かゝる間にこの國は幾多の强敵との戰爭に卷込まれた――卽ちオースタリー、プロシア、サルヂニア、スペイン、グレート・ブリテン、オランダなどである。內部に於ける兇暴な鬪爭は、外部からの强力な攻擊と相俟つて、强い、有効な政府を必要とした。絕對權を有する九人の委員よりなる公安委員會が一七九三年四月に設置されたが、一七九五年十月にはこれが五人よりなる執政官政府によつて取つて代られ、それが又三人よりなる統領政府に道を讓つた（西暦一七九九年）、而して最後にこの統領政府が靜かにナポレオン・ボナパルトの君主政治的帝國に變更されたのである（西暦一八〇四年）。

一一五、ナポレオン・ボナパルト　ナポレオン・ボナパルト――世界の顯著なる軍事的並に政治的天才の一人――がフランス人に生れたことは運命の偶然であつた。西暦一七六八年卽ち彼の生れる前年に、彼の兩親が住んでゐたコルシカ島が、これを有つてゐたゼノアによつて競賣に附された。プリテンはこれを手に入れることに熱心であつたが、ショワスールの機敏はこの賞品をフランスのために取得した。さうでなかつたならば、ナポレオンはジョージ三世の臣民に生れて、海軍々人たるべくイギリスに遊學したるあらう！

右の事情によつて、彼はフランスの士官學校に入學し、戰爭が勃發した時には革命軍に加はり、速かに最高級の才能と意力とを示して、一七九六年には「イタリー軍」の指揮權を受け、間もなく幾多の驚くべき勝利によつてヨーロッパの形

勢を變化せしめた。彼の軍事的卓越は一七九九年に起つたフランスの政治的改造に當つて決定的な發言權を彼に與へたので、彼は最高の權力の地位に置かれたる三人の統領の一人となつた。一八〇二年には彼は事實上獨裁的權力を有する終身「第一統領」に任ぜられ、――アミアン媾和が少許らくの間戰爭からの休息を與へたので――彼はフランスの國內行政――政治、法律、財政、宗教、教育、公共事業、及び凡百の他の事物――の練達せる改造のために彼の大勢力を捧げた。

西曆一八〇三年には戰爭の開始がヨーロッパ改造の機會を彼に與へた。彼はあまりに有効にその機會を捉へ、あまりに急激な變化をなしたゝめに民族主義的反動の一般的感情を惹起し、その感情が終に彼の巨人的勢力を以てしても强過ぎるやうになつたのである。殊に中世的混沌がまだ殘つてゐたドイツ及びイタリーに於ては、彼の巨腕は目ざましかつた。彼は「神聖ローマ帝國」を一掃してドイツを三つの主なる部分に分けた、卽ちオースタリー、プロシア及びライン同盟であつて――最後のものは決定的にフランスの支配の下にあつたのである。同樣にイタリーに於ては、彼は法王廳の政治的權力を掃蕩して、自ら王號を稱し、事實上彼の權力の下に半島を統一したが、こゝでも亦三つの行政的區分が維持された。彼は彼の兄弟の一人をオランダ王となし、他の一人をスペイン王とした。けれどもこの最後のものは彼の沒落を招いだ。それはウェリントンの遠征で名高い半島戰爭を起した。スペイン人とポルトガル人とは、イギリス人に援けられて、頑强に抗爭した。一八〇九年にナポレオンの衰頽が始つたのである。

一一六、反動　半島戰爭の遲々たる疲果てさせるやうな過程は大陸ヨーロッパの諸國民を鼓舞して起つてナポレオンの羈絆を破らんとするに至らしめた。オースタリー、ロシア、スウェーデン、プロシア、イタリーが、順次にフランスに叛抗した。コルシカの風雲兒は彼の帝國を保持するために莫大なる努力を拂つたが、この仕事は人力を超えてゐた。彼は災難なるロシア侵入に於て彼の軍隊の最

善のものを失ひ(一八一二年)、ライプチヒに於ける三日間の戰役では回復すべからざる敗北を嘗め(一八一三年)、フランスに追返されて降伏と退位とを餘儀なくされた(一八一四年)。翌年の必死となつた回復の努力はウォータールーに於て阻止され(一八一五年六月)ナポレオンは聖ヘンナに於ける寂しき流謫の裡にその生涯を終るべく送られた。彼の後年の戰爭の主たる効果は、ドイツ及びイタリーに於て、從來殆んどポーランド人獨特のものであつたところの民族主義の感情を起したことである。

實際、民族主義と民主主義とは、一七八九—一八一五年の四分の一世紀の騷がしい事件によつて生起せしめられたる二つの最も有力な原理であつた。混亂せる大陸を整理するために初めはパリ後にはウィーンに會合したる(一八一四—一五年)勝利をえたる聯合諸國の君主及び大臣に取つては、これら二つの原理は「革命」なる一つの言葉に含められたのであるか、この「革命」に就ては彼等は極端なる恐怖をいだいてゐた。そこで決定的なウィーン條約(一八一五年)は、苦痛なる間奏樂の總ての痕蹟と記憶とを塗抹して、西暦一七八九年以前の狀態に復歸せんとする外交家の最高の努力を表示した。

フランス、スペイン、ポルトガル、サルヂニア、スウィスに於ては、彼等はかなり成功した。けれどもドイツ及びイタリーの列侯を再起させることは人智では出來なかつた。ドイツは三十三の成員よりなる漠然たる同盟に改造された。イタリーでは八つの國家——その中の一つを除く全部が直接又は間接にオースタリーに賴つてゐた——が國民的統一の障碍として建設された。オランダ及びベルギーはオレンジ家の王子の下に合同ネーデルランド王國を形成するために接合された。

革命の再發を防止するためにヨーロッパの指導的な列强は「神聖同盟」に參加し(一八一五年九月)、條約を嚴守するためにオースタリー、プロシア、ロシア及び

プリテンの諸政府によつて四重の誓約がなされた(一八一五年十一月)。

一八一五年から一八四八年に至るまで、反動――オースタリーの大臣メッテルニッヒ公なる人物に於て例證せられたる――が全ヨーロッパに於て勢を振つたが、時々、殊に一八三〇年には、恐るべき革命の企圖によつて攪亂された。しかし、一八四八年には、すさまじい一般的な攪亂の裡に、民主主義と民族主義との連勝的前進が再始された。

第三十章　人類の再統一

一一七、機械的革命　反動時代中ですらも民主主義と民族主義との原理は若干の前哨的成功を獲得した。アメリカ合衆國が驚くべき速度を以て、領土、富、及び人口に於て引續き發達したばかりでなく、神聖同盟によつて支配された舊世界に於ても、グレート・プリテンは選擧制改正法を(一八三二年)而してフランスはそのオルレアン王朝の憲法を獲得した(一八三〇―四八年)。しかし、この時代を通して民主主義よりも一層有力であつたのは民族主義の新興精神――一つの「民族」であると自認する各々の而して有らゆる國民は自治的な國家となるべきであると主張する精神であつた。一八二二年にはブラジルがポルトガルから獨立を宣言し、一八二四―五年にはコロンビア、メキシコ、ブエノス・アイレス(アルゼンチナ)、ペルー、ボリヴィア、チリーのスペイン植民地及び中央アメリカに於ける若干の小植民地が、宗主權を有する共和國を建設した。一八三〇年にはベルギーがオランダから分離して、ウィーン條約及びその保障を無視して自治的な王國となつた。一八三二年にはギリシアが――ロシア、フランス及びプリテンからの援助を得て――トルコの主權からの解放のための恐ろしい十年間の爭ひに好結果をもたらして、バヴァリアのオットーを國王に仰いで獨自の多事なる生涯に門出した。

けれども民主主義者と民族主義者とが世界の舞臺の總ての表面に於て顯著なる

地位を占める反動主義者と闘つてゐる間に、背面に於ては長い間には人類の運命の形成者として計るべからざる程一層重要なる社會狀態の變化が起りつゝあつた。十九世紀は特に科學の時代であつた。純正思想の領域に於ては地質學と生物學との啓示が無限なる時間の視野を展開し――それは十六世紀に於てコペルニクスの天文學によつて開示された無限なる空間の視野に比較すべきものである――斯くて人類の事件を地球進化の記錄に於けるそれらの適當な規模に還元した。同時に、應用科學の領域に於ては機械的革命が行はれたが、それは遠隔の地方間の通信手段を急速且つ便利ならしめることによつて、人類の再統一を將來したのであつて、この統一の宏大なる結果は今でも辛うじて現はれ出したばかりである。鐵道、汽船、郵便制度、電信、少許らくして繼いて現はれたる電話、自働車、航空機、及び最後には無線通信が、遠く離れたる人類の人種及び文化を親密なる相互的接觸にもたらした。巨大なる規模の光と熱とが造られた。第一次の結果が光明であるか火災であるかは尙言明することが不可能である。

一一八、ヨーロッパの新なる膨脹　機械的革命は西洋――殊にグレート・ブリテン、ドイツ、フランス、イタリー、及びアメリカ合衆國――の事業であつた。加之、西洋は地球の最遠隔の地方と卽時に通信し得べき手段と、それ自身とその商品とを急行配達を以てそこに送致すべき手段とを工夫したゞけでなく、それは又戰爭の武器――强力なる爆藥、巨大なる砲、堅固な武具、致命的ガス――を發明したので、その欲する如何なる地方で　容易に征服し且つ支配することが出來るやうになつた。そこで西洋は商業を行ひ、市場を探し、探險に出發し、冒險に耽りつゝ、地球の表面の大部分に確くその勢力を植つけた。(一)合衆國は――一八〇三年にルイジアナを買收し、一八四五年にテキサスを獲得し、一八四六年にカリフォルニアを征服して――速かにその領土を擴張したので、終に太平洋海岸に於けるその自然的制限に達した。(二)ロシアは東に向つて膨脹し、シベリアの尨

大なる地方を征服し、終に一八五八年には太洋に達してウラヂオストックを建設した。(三)ブリテン帝國は――十八世紀の頽勢から回復して一層開化せる植民政策を行ひ――大なるカナダの奥地、オーストラリアの島大陸、南アフリカの廣い草原、及びインドの多くの國家並に人種を、速かにその範圍の中にもたらした。(四)フランスは植民的活動を再始してアルゼリア(一八三〇年)、チュニス(一八八一年)、象牙海岸(一八九一年)、ダホメー(一八九二年)、マダガスカル(一八九五年)、及びモロッコ(一九〇四年)に對する支配權を主張した。

けれども十九世紀末以前に二つの新しい要因がこの狀勢中に入つて來た。第一、ドイツとイタリーとは共に長く望んでゐた民族的統一を達成して、共に熱病のやうな性急を以て後ればせながら海外發展の經歷に船出した。多くは明いてゐない「太陽中の場所」を發見せんとする彼等の決心によつて、アフリカ(一八八四年)及び太洋洲(一九〇〇年)が形式的に「勢力範圍」に分割された。しかし、この好都合な分割の原理を支那に適用せんとの提議は、第二の要因を活躍せしめるやうになつた。支那が「外夷」の最初の行動に抵抗してこれを拒否したゞけでなく、日本も亦アジア人自律主義の味方となり、殆んど奇蹟的なやり方によつて、それ自身を第一流の西洋式の陸海軍國に改造して、ヨーロッパ人の前進に挑戰して、これを阻止した(西暦一九〇四―五年)。

一一九、民族主義の勝利　十九世紀の最後の三十年間の世界政局の主なる攪亂的動因は、前述の如く、「太陽中の場所」を求めんとする新興諸民族であつた。我等は一層正確にそれらが何ものであり又如何にして存在するに至つたかを知らねばならぬ。

一八四八年の擾亂(**一一六**を見よ)は少許らくの間民主主義の信望を奪つた。しかし、それは割合に民族主義を進歩せしめた、何となればそれは國際政局の支配權を親切な無能者の手から奪つて、ビスマルクのやうな鐵血の人、カヴールのや

うな手腕の人、及びナポレオン三世のやうな運命の人に與へたからである。

ナポレオン三世（偉大なるコルシカ人の甥）は一八四八年卑賤より身を起して（最初は大統領として、次には皇帝として）一八七〇年に至るまで有害なる光彩を以てフランスを統治したのであるが、彼は主義としては民族主義助成に傾いてゐた。それが彼に大なる不便を與へた、何となればフランスに於てはそれが光榮の追求を必要とし、ポーランドに於てはそれが彼をロシアと衝突せしめ、イタリーに於てはそれが彼のプロシアを盟主とする統一せるドイツは、一八七一年一月十八日ヴェルサイユに於て宣言された。

イタリーの統一はドイツのそれよりも長く且つ複雜なる過程であつた。それは一八五九年にサルヂニア王がナポレオン三世の援助をえてオースタリー人をミランから驅逐し、ロンバルヂー及びパルマを併合した時に有效に始つた。それは一八七〇年同じ君主が――今や自らイタリー王と稱して――勝利をえたるプロシア同盟として、ローマを占領し且つ法皇領を併合した時に終つた。

ドイツ及びイタリーの統一を將來したる同じ民族的運動が、トルコ帝國に於ては分裂を促す力として働いた。セルビア及びルーマニアは、長い爭ひの後に、クリミア戰爭の終末（一八五六年）に於て共に實際上の獨立國と認められ、同じ承認

その準備を新にして、彼はデンマーク（一八六四年）、オースタリー（一八六六年）、及びフランス（一八七〇―一年）の討伐によつて思慮深く彼の目的を達成せんとした。プロシアを盟主とする統一せるドイツは、一八七一年一月十八日ヴェルサイユに於て宣言された。

がロシア・トルコ戰爭を終結せしめたるベルリン條約（一八七八年）によつてブルガリア及びモンテネグロに與へられた。

一二〇、大戰及びその後　一八七六―八年のロシア・トルコ戰爭と、これを終結せしめたるベルリン條約とは、不幸にしてバルカンの紛議を絶滅せしめなかつた。オットマン人――アジア人、遊牧人、異國人、不信者――はまだビザンチン帝國の故地を所有し、トラキア及びマセドニアに於ける多數のキリスト教國民を支配してゐた。而してオットマン人は非常に焦慮せる精神狀態に置かれた。十九世紀までは、彼等の統治は開化的ではなかつたとしても、一般に安易で、寛容で、世界主義的で、慇懃であつた。けれども、ギリシア人、スラヴ人、ルーマニア人及びブルガリア人が順次に民族主義に感染して、その影響の下に高き宗教的氣質を發達せしめた時に、オットマン人も亦彼等の沈着を失つて、同じやうな愛國的なモハメッド教的な情熱を以て迫害し且つ殺戮するやうになつたのである。

それ故、バルカンの不安は漫性的となつたが、不幸にしてその影響はバルカンのみに限られなかつた。ロシアとオースタリーとは共に速かに渦中に投じ、各々終局に於てトルコの遺産と東方への大道の支配權とを獲得せんと望んだ。この複雜な關係はこれだけに止まらなかつた、何となればオースタリーはドイツ及びイタリーと共に有力なる三國同盟の一員となり（一八八二年）、これに對抗するためにロシアはフランス（一八九七年）及びグレート・ブリテン（一九〇七年）と共に三國協商に參加したからである。

多くの挿話と事變とが起つて、一度ならず（殊に一九〇九年と一九一三年）バルカンの紛爭が世界戰爭を勃發せしめるかと思はれた。他の而して等しく由々しき爭因が列强の間に存在してゐたが、それは彼等の勢力が全世界に擴つたことに因るものであつた。最後に、一九一四年に、バルカンの一事件――六月二十八日セラエヴォに於けるオースタリー大公の暗殺――が國際的激情の倉庫を爆破し、四

ヶ年以上の間（一九一四年八月―一九一八年十一月）世界未曾有の恐るべき破壞的な鬪ひが行はれ、殆んど人類の全體をその渦中に投じた。これが機械的科學の勝利とその結果たる人類の再統一との最初の偉大なる結果であつたのだ！

ヴェルサイユに於て和が媾ぜられた時（一九一九年）、こゝに集つた諸國民の最初の大事業は世界的な國際聯盟を建設することであらねばならぬと考へられた。その聯盟の高き任務は諸政府の上に權力を行使し、合理的方法によつて國際的紛爭を決定し、戰爭の再發を防止することにあるべしとせられた。世界戰爭が、若しも再び起るならば、殆んど文化の破壞と人類の絕滅とを來すべきが故に、人類の總ての味方はこの聯盟を有力且つ確實なものとするために彼等の努力と決心とを集中することが必要である。

第六篇參考書

Bellock, H. The French Revolution.

Fyffe, C. A. Modern Europe, 1792-1878.

Gooch, G. P. Modern Europe, 1878-1919.

Grant, A. J. History of Europe, Part III. (1500-1914).

Hudson, W.H., and Guernsey, I. S. The United States.

Mahan, T. Influence of Sea-Power on History.

Marvin, F. S. The Century of Hope.

Muir, Ramsay. Expansion of Europe.

Pollard, A. F. Factors in Modern History.

Porter, R. P. Modern Japan.

Rose, J. H. The Revolutionary and Napoleonic Era.

世界史提要　大尾

昭和四年九月二十六日初版印刷
昭和四年九月二十八日初版發行

世界史提要
定價壹圓七拾錢

著作者　小島幸治
譯者　東京市牛込區早稲田鶴卷町四四三　角田誠造
發行者　東京市神田區表神保町一〇　井波康三郎
印刷者　東京【西村印刷所】三崎町

發行所　東京市牛込區鶴卷町四四三　東京泰文社
振替東京六〇六九三番
電話牛込一二五三

小藤

55
38

556
385

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black